
天使に愛の歌を

雪村 静馬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使に愛の歌を

【Nコード】

N3923U

【作者名】

雪村 静馬

【あらすじ】

僕と舞は姉弟でありながら、同時に恋人でもある。

誰にも知られないように時間を育んでいた二人だが、友人と思っていた七瀬が僕に告白したことで、運命の歯車が回りだす。

愛し合っているにも関わらず、舞と一緒にいることができなくなり・・・。

? prologue

? prologue

クスクスと声を潜めた笑い声が薄暗く狭い部屋に広がっていった。真夜中をずいぶんと過ぎた冬の日。白い壁を背にして、足の先から頭の天辺まですっぽりと毛布で覆った僕らは、互いが互いを温めるようにして体を寄せ合っていた。一つしかない小さな窓から見える金色の月はとても綺麗で、冷たくて、どこまでも澄み切った空に作り出した光輪。神々しいまでに輝くそれが、闇に沈んだこの部屋まで薄明かりで照らしていく。

「智也^{ちや}。もし、世界が明日終わってしまうとしたら、あなたは何を願う?」

隣で何が楽しいのか笑っていた彼女は、内緒話をする時のように、ぴつたりと体を寄せてそう言った。

「明日世界が終わってしまうなら、何を望んでもしょうがないんじゃないの?」

「また、そんな夢のないことを言う」

不満そうに下唇を持ち上げる彼女。それが彼女の癖であることを僕は知っている。ずっと一緒にいて、ずっと彼女を見ていたからこそ、分かることだ。

僕は少しだけ考えを巡らした後、やっぱり最初に思いついたことに行きついて、でも、それも仕方のないことだなと思った。

「僕は、舞の幸せを望むよ」

それが僕の思いつくただ一つの望みだから。

「明日世界が滅びてしまうのにな?」

「うん」

「舞は?」と僕は訊ね返す。

彼女は一瞬真剣な顔をした後、

「私もいっしょ。智也の幸せを願うと思う」と言った。「智也が泣かないように、悲しくないように、苦しめないように、笑っていられるように、幸せでいられるように・・・きつと、私は願うと思う」

僕より頭一つ分だけ小さい彼女の頬が肩に当たって、僕は少しでも彼女がきつくならない様に場所を調整する。二人の足が温もりを求めるように交差し、布ずれの音が微かにした。

「そっか、僕ら二人がお互いの幸せを望むのなら、たぶん二人とも幸せになれるだろうね」

「明日世界が滅びてしまうのにな?」

「うん、きつと」

それは確信に近い予感。世界が滅びることよりも、君が泣いていれることの方が僕にとっては辛いのだから。きつと、君が幸せであれば僕も幸せでいられるだろう。

「二人の幸せか・・・」

膝を抱えるようにして自分の身体を丸めた彼女。毛布で唇を隠すように下を向いたから、長いまつげが金色に輝いているのを見つけた。栗色の髪からはシャンプーの香りがして、同じものを使っているはずなのに特別な香りのような気がしてしまうから、なんだか不思議に思えた。

「ねえ、智也」と首を斜めに傾けて、彼女はその美しい横顔で僕に問いかける。「私たちは神様にも背いているというのに、幸せになることなんてできるのかな？ 願う相手がないというのに、願いは叶えられるのかな？」

グイグイと頭で僕の肩を押す彼女。

小さな窓が外の冷気でカタカタと音を立てる以外は、まるで世界には僕と彼女しかいなくなっただんじやないかって思えるほどの静寂が支配していた。お互いの息遣いさえ感じられるほどの静寂。その静かで冷たい冬の部屋で、彼女の体温を強く意識する。

「神様なんていないし、いたとしても望みをかなえてくれるほど暇じゃないよ」と僕は外を見つめながら言った。

同時に肩に感じていた力が弱まる。

「そう言えば、智也は神様とか、昔から信じてなかったわね」

「うん。偶然が必然と重なって偶然を呼び、その偶然が奇跡と呼ばれる。ただそれだけだよ。だから、奇跡が起こることもないし、祈りが聞かれることもない」

「じゃあ、智也は誰に願うの？私が幸せであるように・・・」

僕は彼女の形のいい瞳を見つめながら、やっぱり不安で仕方がないのだと分かった。神にも背いている僕らを、社会は受け入れてはくれないだろうから。この世界は受け入れてくれないだろうから。だから、どこにも居場がないなら、彼女は僕が守らないといけなんだと強く思った。

「僕は望むんだ。願うんじゃない。望んだことは努力するからね。奇跡なんてものに頼らなくて、必然が偶然を、偶然が必然を呼んでくれるさ」

「それって、智也が私を幸せにするってこと？」

「ああ、僕以外に舞を幸せにすることのできる奴なんていないだろう？それがたとえ神様でも僕は負ける気がしないよ」

だって、誰よりも君が好きなのだから。愛しているのだから。全能な神がいたとしても負けることはないさ。

「じゃあ、私も智也を幸せにしてあげる」と彼女が笑った。

「頼もしいね」

僕が君の居場所になり、君が僕の居場所になってくれる。なら、この世界が僕らを受け入れてくれないとしても、寂しがることなんてこれっぽっちもない。むしろ、僕らの方から世界を必要としないくらいだ。だって、僕の世界は彼女なのだから。だから、彼女さえ傍にいてくれれば僕は何も望むものはないのだ。そう、彼女さえい

てくれれば……。

「姉さんは後悔してない？」

僕は急に感じた儂い感覚に突き動かされてそう言った。

「何を？」

月に照らされた薄明かりの中で、彼女は静かにそう訊く。琥珀色の瞳が一瞬だけ揺れたような気がして、その色の深さに吸い込まれそうになる。

僕はゆっくりと言葉を区切るようにしながら、一音一音、まるで話ができるようになったばかりの子供のように重たい口を開いた。

「僕と……付き合っていることを、後悔してない？」

姉弟でありながら付き合っていること、愛し合っていること。それを彼女は悔いてないだろうか？その不安はこういう静かで冷たい夜に襲ってくるのだ。静かだから、寒いから、隣にある温もりの大切さを噛みしめさせられて、いつか失ってしまうんじゃないだろうかという不安が心を締め付けてくる。

「僕と罪を犯してしまったことを後悔している？」

情けない、と自分でも思った。今、彼女が僕を幸せにしてあげると言ってくれたばかりじゃないか。それなのにもう、彼女を失うことを恐れている。彼女がどこか遠い場所に行ってしまうような気がして、もう手の届かない場所に消えてしまうような気がして、不安に駆られてしまっている。でも、どうしても、そう訊ねずにはいられなかった。

「そうね」彼女は貝殻のような自分のピンク色の爪を撫でながら、「後悔がないって言うのと嘘になるわ。だって、そうやって智也を苦しませてしまうことになってきているのだから」と言った。

そんなことはない、慌てて否定しようとしたけれど、それを遮るように人差し指を僕の唇にあてると、彼女は小さな子供に教え諭す時のようにゆっくりと優しい声で微笑する。

「私たちは苦しんだ。私も、智也も……。そして、私たちは誰からも祝福されない未来しか持っていない。だから、罪の意識はあるし、もし地獄と言うところがあるなら、私と智也は一緒に落ちてしまおうでしょう。だから、後悔はずっとし続けれると思う。これで良かったのか？ 智也にこんな人生を背負わせることになって良かったのか？ って」

小さく息を吐き出した彼女は、「でもね……」と困ったように笑って言ったのだ。

「私は智也を愛してしまった。そして、智也も私を愛してくれた。それならどんな後悔も、苦痛も、侮蔑も、嘲笑も、きつと笑い飛ばせると思うの。私はきつとずるいから、何よりも智也から愛してもらうことを望んでしまおう」

カタカタと音を立てる窓。外には綺麗な月が輝き、闇一色の空にうす明りを投げていた。僕はただその明りを見つめながら彼女の言葉を反芻する。幾度も幾度も。

愛した相手に愛されたいと願うことがそんなに罪深いことなのだろうか？ そんなにずるいことなのだろうか？

倫理と感情。それは光と闇のように相反するもので、常に二人の

関係を問い続けるのだろう。離れても感情が引き裂かれ、一緒にいても倫理が邪魔をする。どこにいても自分を責め、相手に許しを請い、そして触れ合うたびに心が痛むのかもしれない。それでも僕らは一緒にいることを選んだのだった。

「もし、舞がずるいというのなら、僕も同じだよ。姉さんが好きになっちゃった。そして、愛する人に愛されたいと願っちゃった。それをずるいというのなら、僕もずるい人間なんだ」

でも、「智也はずるくないよ」と彼女は言う。「だって智也ほど真っ直ぐで公平な人はいないもの。私があなをたぶらかしたのよ」

妖艶な笑みを浮かべて見せる姉さんは、やっぱり似合っていないかった。どこまでも純粹で真っ白な女性。それが彼女だから、僕をたぶらかすなんてこと、とてもじゃないけどできやしないと思う。人からしてみればヒキ目だとか、恋は盲目ということになるのかもしれないけれど、僕はそう言うのを差し引いても彼女ほど澄んだ瞳をした人はこの世界にはいないと信じているのだ。

「ねえ、智也。手、繋ごっか？」

毛布の中で繋がる手と手。二人の指が互いに絡み合い、ゆっくりと結ばれていく。ひんやりとした感触に彼女が冷え症だったことを思い出して、包み込むように彼女の手をできるだけ優しく握り締めた。

「智也の手、あったかい・・・」

「姉さんの手は冷たいね」

静まりかえった部屋の中で、唯、彼女の息遣いが聞こえてくる。窓の外には金色の月。闇にぼっかりと浮かぶそれを見て、僕はなんだか切なくなつた。

舞みたいだ。そう思ってしまったから。

この闇のような世界でたった一つ穏やかな輝きを放つ月。それは僕にとつての彼女のようだった。だから、月の傍に寄り添う光がないことが切なくなる。

「智也？姉さんって呼ぶの、もうやめてくれないかな？」

僕が一人で考え事していると、彼女にしては齒切れが悪くそう言った。

「どうして？」

「だって、私は智也の姉さんじゃなくて、恋人でしょ？」

「うん」

「だったら」彼女は恥ずかしそうにうつむいた後、「いつも『舞』って名前を呼んで、姉さんじゃなくて・・・」と言った。

僕は小さな彼女の手を少しだけ強く握り返して、

「分かった。舞は僕の恋人だからね」と微笑する。

空気がひんやりと澄んで寒い夜。僕らは互いに体を寄せ合つた毛布の中で、静かに話をする。まるで世界から隠れているように。まるで世界を恐れているように。でも、僕の隣には彼女がいたから、これ以上にないくらいに安心していられたんだ。

「智也……」

彼女が僕の名前を呼べば、何だってできる気がした。彼女の小さな笑顔を守れるなら、何とだって戦える気がした。だから僕はこの胸に溢れるくらいの愛しさを込めて彼女の名前を呼ぶのだ。

「舞、ずっと傍にいて」と。

窓から見える月の傍には、かすかに星が瞬いていた。

冷たい風の吹きつける街。レンガで舗装された歩道を蹴りながら、僕は月を見上げた。薄い雲が金色の輝きを覆うように流れていき、瞬く星が銀色の光を放つ。闇に沈んでいる部分はどこまでも深く、黒い色をしているというのに、月や星は決して飲み込まれることはない。それはあたりまえかもしれないけれど、特別な事のように感じるのだ。もし、僕に絵の才能があったなら、この月と星を迷わず描いているのだけれど、と少し残念に思う。

「今日が何の日か、皐月くんは知っている？」

そう僕に聞くのは、同じ学部の子七瀬香織。たまたま同じ授業を取っていたのもあって、大学に入学してすぐに話すようになった女子の一人だった。

「さあ・・・」

祝祭日に疎いと、いつも頬を膨らませる舞の顔が浮かんで、僕はぼんやりと今日が何月何日だったか思い出そうとする。なのに、七瀬は僕が思い出す前に、

「今日は十二月二十四日。クリスマスイブだよ・・・」と、呆れたように教えてくれた。

「そういえば、そうだった」

「クリスマスイブを忘れるなんて、皐月くんくらいだと思っ」

頭一つ分小さい彼女。隣を歩く彼女を見ると、器用に片方の眉を

あげて見せてくれた。同時に長いポニーテールが左右に大きく揺れる。

「明日がクリスマスだってことは覚えていたんだけど、今日がクリスマスイブだってことは忘れてた」

「なにそれ」

彼女のブーツがレンガを蹴り、あまり人通りの多くない街路に足音がこだまする。ヨーロッパの街並みを思わせる街燈の下で、カッソ、カッソと、時を刻むように音を立てる。

「私たちの歳なら、イブのほうが、普通、大事なんじゃない？」

「何で？」

「だって」七瀬は、分かってないと言わんばかりに溜め息をつく
と、

「恋人と過ごす素敵なクリスマスイブを、普通は期待するじゃない？ だから、恋人がいればわくわくしながらイブを待つし、いなければ、それはそれで意識してしまうでしょ？」

「どうして、恋人がないのにイブを意識するわけ？」

彼女は一度僕の顔をポカンと見つめると、呆れたと言わんばかりに額に手を当てる。

「だって、羨ましいと思うじゃない、普通。あっちでもこっちでもカップルが幸せそうにしているのを見て、恋人のいない自分には関係がないと思っても、つついイブを意識してしまう。意識しない

ようにしていることが、かえって意識させるのよね」

「そんなもんかな」

「・・・そうよ」

本当のところ、彼女の言うことは分からないでもなかった。もし、舞と一緒にクリスマススイブと一緒に祝うことができたなら、僕にとっても特別な日になっていたのかも知れない。でも、舞はクリスマスが嫌いだったから、僕らには関係のない行事となっていた。

確か一緒に暮らすようになって、初めて迎えるクリスマス。僕らは一つ違いだから、僕が中学二年、姉さんが三年の時。家でクリスマスの準備を始めようとしていた僕は、姉さんに呼び止められてこう言われたのだ。

「智也くん？ クリスマスが何の日か知っている？」と。

当然プレゼントがもらえる日としか思っていなかった僕は、その由来なんて考えてもみなかったわけで、

「サンタクロースがくる日・・・かな？」と何とも幼稚な答えを返したのだった。

当時、まだお互いが一緒に暮らすようになって間もないころだったから、突然できた美人の姉さんとクリスマスを楽しむことで、少しでも仲良くなれたらという気持ちもあったと思う。なのに、姉さんはいつになく真剣な顔をしたかと思うと、

「クリスマスはキリストの誕生日なの。智也くんはクリスマスチャンじゃないでしょ？ 私も、私たちの両親もクリスマスチャンじゃない。なら、どうしてクリスマスを祝うのかしら？」と僕に訊いたのだ。

今まで当然のように祝ってきたクリスマス。実際は皆がしているから同じように騒いでいただけで、何も考えていなかった僕は姉さんのその言葉に面くらってなにも言えなかったのを覚えている。

そして、彼女は聖母のように優しく瞳を細めると、

「だから、敬虔なクリスマスチャンたちが大事にしているクリスマスを、私たちが面白半分に祝ってはいけけないと思うの」と言ったのだ。

その日から、僕の中でクリスマスは無くなった。正確にはそのあるべき姿になったとも言えるかもしれない。神聖な、自分とは関係のない日へと。だから、本当はクリスマスも、クリスマスイブも、その日付を全く意識していなかったのだ、僕は。

「臯月くんは彼女、いないの？」

隣を歩く七瀬の突然の質問に、僕はドキリとする。

「いないよ。知ってるだろ？」

だって、いつも七瀬とは顔を合わせているのだから。

「高屋さんと、最近仲いいけど・・・付き合い出したわけじゃないの？」

「全然違うよ。確かに最近よく話すけど、そんなんじゃないよ。実際、僕はクリスマスイブに七瀬と帰路を急いでるわけだし」

分かるだろ？ と両肩をあげて見せる。

「確かにそうね」

彼女はそれで満足したのか、さらに追及しようとはしなかった。

「それこそ、七瀬は彼氏とかいないの？ 結構、人気あるみたいだけど」

そう尋ねた僕に、彼女はさっきの僕を真似てか、
「分かるでしょう？」と両肩をあげて見せた。

それは、七瀬に彼氏が出来れば僕にもすぐに伝わる、ということだろう。まあ、よく一緒にいるのだから当たり前か。

改めて横を歩く彼女を見る。目立ちのはつきりとした顔は、可愛いというより美人。小柄で細身のスタイルは、僕からするともっと食べたほうがいいという気になるが、そこがいいと言う奴もたくさんいる。左右に揺れるポニーテールは彼女の性格に合った髪形で、サバサバしていて割と話しやすい七瀬によく似合っていた。正直、うちの学部で気になる女子を上げると言われたら七瀬香織の名前を上げる奴は多いと思う。なのに、それを鼻に掛けない気安い雰囲気は、さらに彼女の人気を高めることになっていた。まあ、つまりは悶々とした恋心を七瀬に抱いている奴は多いというわけだ。

「ああ、世間はイブで浮かれているっていうのに、私は淋しく明けりのついていない家に帰らないといけないのか・・・その点、臯月くんは実家通いでいいわよね」

「そうかな？ 逆に僕は一人暮らしをしている奴のことが羨ましいけど・・・」

「そう？　こんな人恋しい夜に一人暮らしは悲惨よ」

そう言うと彼女は困ったように笑って、

「私も彼氏、作っちゃおうかな・・・」と独り言のように僕の一步前を歩く。

「七瀬ならすぐにできるんじゃない？　結構、気になるって奴も多いし」

「そう・・・好きな・・・くん・・・ね」

突然、冷たい風が僕らの間を吹き抜け、ぼそぼそと早口で言った彼女の言葉は夜の街に流されていった。

「今なんて言ったの？」

そう訊きなおした僕に、七瀬はまた困ったように笑って、

「何でもない」と首を振る。

洒落た街燈の下で伸びた二人の影。真っ黒に引き伸ばされた二人はカツカツと足音に合わせてレンガを蹴っていく。一步先を歩いて行く彼女の後を追うようにして、僕はスニーカーを前に進めた。

「ねえ」

ちょうど二人の家の分岐点に差し掛かった時、七瀬はいつもの「また明日」と言う代わりに、金色の月を瞳に映しながら、「海を見に行かない？」と僕を誘った。

それは、独り言を言う時みたいに、小さく感情の読めない声だっ

たから、なんだか彼女が迷子になった子供みたいに思えた。

『淋しく明りのついていない家に帰らないといけないのか・・・』

彼女のさっきの言葉を僕は何故だか思い出して、胸のあたりが苦し
いような、ざわざわした妙な気持ちになる。

「冬に海は寒いと思うけど・・・少しだけならついて行くよ」

大きく引き伸ばされる二人の影。僕は再び歩き出した彼女の左右
に揺れるポニーテールを眺めながら、カツンカツンと時の刻まれる
音を聞き続けるのだった。

「こうしていると、世界の果てにいるような気がしてこない？」

そう言ったのは七瀬だった。

見渡す限り広がる海、海、海。目の前に広がるその広大な景色と、波が静かに歌う音が、この場所にはあふれていた。天を仰げば金色の月が輝きを増し、銀の星が笑っている。僕はゆっくりと首を一回転させた後、

「世界の果てがもしあるとすれば、こんなところなのかもしれないね」と答えた。

僕は立ち並ぶ住宅の間を抜けた浜辺に腰をおろして、膝を抱えるようにして溜め息を吐く。

黒い海が空の星や月を映し、波が揺れるたびにキラキラと輝きを放つ。それはまるで海の中に町があるみたいで、何とも言えない美しさだと思う。

キラキラ……。

ユラユラ……。

水面で屈折した不思議な光が乱反射して、神秘的ともいえる輝きを作り出す。ただここには美しさがあって、僕らが知っている場所とも思えないほどに、懐かしく、暖かく、そして、哀しかった。

「人は、あまりにも綺麗なものを見てしまうと、哀しくなるのはどうしてなんだろうね」

隣に座る七瀬に問いかけるでもなく、僕は独り言のようにそう言

葉を落とした。

「そうね」彼女は自分の薄い唇に人差し指を当てた後、「それは人間が美しくありたいと願っているから・・・、求めているから哀しくなるのかもしれないよ」と言う。

人が美しくありたいと願うから。だから、哀しくなる。

なんとなく分かるような気がして頷く僕を、彼女が星のちりばめられた瞳で見つめる。

「自分の嫌なところとか、他人の嫌なところを見つけて・・・。少しずつだけど私たちは大人になるにつれ、『この世界が思っていたほど綺麗じゃなかった』って気づくんだと思う。でも、こうして本当に綺麗な場所を知ってしまったと、まだ望みはあるんじゃないかって思えるの。でも同時に自分の無力さも知ってしまう。だから、哀しくなるんじゃないかな？」

白い横顔が僕に同意を求め、海からの冷たい風に髪がさらわれる。僕は何度か頷いて見せながら、

「なら、大人になるって言うのは哀しいことなのかな」と訊いてみた。

「うつん、私はそうじゃないと信じている」

そう一言で締めくくった彼女。でも僕はその言葉が妙に心地よく感じて、同時に嬉しかった。

信じている。

短く、何の根拠もない言葉だけど、一番説得力のあるような気が

したから。」

「臯月くんは人を好きになったことがある？」

七瀬は水平線の向こうに浮かぶ月を眺めながらそう僕に訊いた。どうしようもなくその人に夢中になったことはあるか、と。

「うん」

「そっか・・・」

姉でありながら恋心を抱いてしまった僕。それは、はじめから運命で決められていたかのように、自然と惹かれていた。だから好きになったのがいつかなんて、僕には分らない。気がついた時には、舞に夢中だったのだ。

「私も、好きな人がいるの」

七瀬は時折吹きつける風に、長いポニーテールを流しながらそう言った。

「好きで、好きで、たまらないのだけど、その人は私を見てくれないくて・・・。他に好きな人がいるみたい」

「僕の知っている奴？」

「まあね」

歯切れ悪く笑う七瀬。彼女は小柄だから、そう言う笑い方をすると全体的に幼く見えることがある。

「今まで、あんまり何かを願ったりしたことはなかったんだけど、そんな余裕もなくなってきたかも」

だって、私を全然見てくれないから……。と七瀬は繰り返す。

「誰だろう？ 僕が知っていて、彼女がいて、七瀬に『全く』興味がなさそうな奴？」

「そうそう。でも、まだ彼女ではないみたい。私が見た感じだけで」

「ん……全然分かんないや」

「だろうね」

そう彼女がどこか残念そうに笑ったから、僕はその相手のことがすぐく気になってしまったのだと思う。自分にできることがあったら協力してあげようという気になったから。

「一体、誰？ 良かったら相談に乗るよ」

「相手は内緒。それに臯月くんに恋愛の相談なんてできるの？ その手のことは『超』がつくほど鈍いでしょう？」

僕だって彼女居るんだけど。

喉まで出かかったこの言葉を飲み込んで、代わりにあいまいな微笑を返す。

僕と舞が付き合っていること。それは誰にも言うことのできない

秘密。いつまでも秘密にするわけにはいかないし、できるとも思っていないけれど、少なくとも今は誰にも洩らすべき事じゃない。それは僕ら二人の暗黙の了解。

「まあ、確かに鈍いかもしれないけど、話を聞くくらいはできるから」

「うん、ありがとう」

銀色の輝きを見せる彼女の睫毛。伏し目がちな七瀬のそれは、まるで涙で潤んでいるみたいに光っていた。

もし、僕にできるのなら、二人の間を取り持ってあげてもいいのに。七瀬とその男ならば、僕らのように世間に遠慮しなくてはいけない間柄ではないのだろうし。何よりも、七瀬が喜ぶのなら、僕も嬉しいから。

「ねえ」そんな思案をしていると彼女は、「一つだけ訊きたいことがあるんだけど、いいかな?」と言った。

特別何かを訊くのに、断りを入れないといけない仲じゃないのに、改まってどうしたのだろうと思いつながら、僕は頷いて見せた。

「臯月くんは運命を信じる?」

運命。

それが彼女からの問。

その問いかけが一体何を意味しているのか、七瀬がどういつつも

りでそう言ったのかわからないまま、僕は答えていた。

「誰かに決められた道筋を運命と言うのなら、それはないと思う。でも自分が何度人生をやり直しても、その同じ決定に至ってしまうことは運命と呼べると思うよ」

「そっか。たとえば、皐月くんがこうして私と一緒にいることとか、学食のBランチばかり注文することとか、みんなシャーペンを使っているのに鉛筆を愛用していることとか？」

おどけたように言ってみせる七瀬。少し上目づかに覗きこまれる瞳が笑う。

「そうそう、よく知ってるね。全部、僕の運命だよ」

「運命もいろいろだね」

「七瀬は、運命はあると思う？」

潮の香りが混じった冷たい風。ザザアンという大きな波の音がして、気泡がはじけていった。

「運命はあるんだと思う。でも、私にやってくるのは難しい運命かな。恋人になれそうにない人との出会い・・・とかね」

「それはまだ分からないよ。これから、その人が七瀬のことが好きになるかもしれない」と僕は言った。

「うん。そうだといいいけど、私は勇気がないから。振られてしまうくらいなら、友達でいる方を選ぶの。あとは彼からの告白を待つし

かないんだけど、その見込は全くないしね。だから、私にやってくるのは難しい運命なの」

出会ったことは必然で、後悔もしていないのにもどかしい。それが私と彼の運命なの。

七瀬はそう言って、片方の眉をあげて見せた。

「でも」と僕は微笑した。「難しいからこそ運命と呼ぶに値するのかもしれないよ。だって、僕の鉛筆愛用の運命なんか、七瀬に言われるまで気付かなかったし、そのうちシャーペンになることもあると思うから」

難しいからこそ、やり遂げたとき、本当に大切な運命になるんじゃないかな？

僕がそう言って、七瀬が自分の長いポニーテールをそっと撫でた。

潮の香りを運んで行く冷たい冬の風。簡素な住宅が立ち並ぶこの海岸線は静かで、ポツポツと窓から漏れる明かりが、石造りの防波堤と洒落たベンチをぼんやりと浮き上がらせていた。

そして、小さな無数の星と大きな一つしかない月。

本当にここは世界の果てなのかもしれない。つい、そう思えてしまふ場所。寂しくて、美しく、哀しくて、優しい。

ザクツと音を立てて、隣に座っていた七瀬が立ち上がる。ブーツの踵が銀色の砂の中に沈み、ザクツと小気味のいい音をもう一度立てた。

「ユキ・・・」

「えっ？ 何？」

そう訊き返した僕に、彼女は幼い子供のような微笑を浮かべて、小さく言った。

「雪が降ってる」と。

まるで、大きな音を出したらそれが消えてしまふみたいに、人差し指を唇にあてて、瞳で僕の視線をさらう。

「本当だ・・・雪が降ってる」

真っ黒な空から落ちてくる純白の雪。それは一瞬天使の羽じやないのだろうか、と思ってしまうほどゆっくりと、ゆっくりと僕らのところに舞い降りてくる。月の光の中、星の瞬きの中、ひたすらゆっくりと・・・。

「ホワイトクリスマスだね。あつ、今日はイブだから、ホワイトクリスマスイブか」

七瀬がかすれた声で、でも嬉しそうにそう言った。

「寂しがり屋の七瀬に、運命からの贈り物かもしれないね」

「なにそれ？」

「さあ？」

僕は銀色の砂浜で顔を合わせる。七瀬のポニーテールに一片の雪が止まって、僕のマフラーに止まって……。それがとっても綺麗だった。

「きつとき、今日はいいい気分で眠れる気がしない？」と七瀬が訊く。

「そうだね。きつとそうだと思うよ」

「運命もたまにはいいことするね」

「たまには、いいことしてもらわないとね。七瀬の運命は気難しいみたいだし」

クシユと笑う七瀬。やっぱりその笑みは小さな子供みたいで、でも、そんな顔をする七瀬はなんだか綺麗だった。

金色の月と銀色の星。静かな海はそつと歌を唄って、冷たい風が潮の香りを運ぶ。そんな世界の果てみたいなの場所に、雪がちらほらと降り始めていた。

天使の羽みたいだね。

そう初めに言葉にしたのは、僕だったろうか、それとも彼女だったろうか。そんなことも忘れてしまうほど、僕は小さな輝きに見とれていた。

：　：

七色のステンドグラス。赤、橙、黄、緑、青、藍、紫が背中から差し込んでくる月明かりを透過して、ある物語のワンシーンを作り出していた。

ちょうどベルを頭からかぶった女性が、両翼の羽をもつ男に赤子を授けられようとしている場面。光臨がいくつも描かれていて、大事そうに母親の手にだかれようとしている子供は一際輝いていた。僕は小さなその子供が、人類史に残る聖人となることを知っている。

「もう、ミサは終わりましたよ」

祭壇の前。七色の光を栗色の髪に写しながら、彼女は僕を見つめる。大きくて深い瞳。蝋燭の明かりで小さく揺れる輝きに、吸いこまれるんじゃないかって気になる。

「いえ、僕はクリスチャンじゃないので」

「そうなんですか？」

「ええ」

「クリスマスの夜に、クリスチャンでもないのに教会へ来たんですか？」

「まあ、そう言うことです」

変わった人ですね、と微笑した拍子に、彼女の来ていた白いコートが揺れて、ブーツが床をコツンと叩く。

「ここは何もありませんよ」

「でも、あなたがいます」と僕。

「私しかいません」

「僕もいるじゃないですか」

一瞬瞳を見開いた彼女は、細い指で口元を覆うと楽しそうにクシユツと笑った。

「確かにあなたも、私もいますね」

「ええ」

静かな夜だった。ただ、静かで何もなく、死んでしまいそうなくらい寒い冬のクリスマス。

見上げると高い吹き抜けの天井が音を拾い、僕らの立てる音が幾重にも響き合い、広がっていった。

さつきまで多くの出席者で埋まっていただろう長椅子も、今は冷たい沈黙をまとい、荘厳な音色を奏でるはずのパイプオルガンも、彼女の背に隠れてしまっている。

「あなたの名前を訊いてもいいですか？」と彼女は言った。

「智也……臯月智也です」

「智也さん……」

「そうです」

彼女は一度首をひねった後、なんだか懐かしい感じがすると、自分の胸の前に両手を重ねた。

「どうしてでしょうね？」

あなたの名前を聞いてこんなに胸が苦しくなるのは。

そう言っただけで、でもそれは居心地の悪いものではなかった。

だから僕は、ゆっくりと彼女を見つめながら言った。

「あなたの名前も教えてもらっていいですか？」と。

クリスマスの夜。

七色の光に包まれた彼女に、僕はもう一度再会することになった。唯、静かで優しく穏やかな夜。どこまでも寒い空気の中で、僕の胸は炎が宿ってしまったみたいに、ドクン、ドクンと沸騰する。

彼女は小さく口を開いて、また閉じる。それを幾度か繰り返したあと、忘れていたその単語をやっと思いついたのか、ゆっくりと何かを確かめるようにして言った。

「私は、マイ。……泉月……舞です」と。

*** : ** *

世界には幾千もの神様がいるそうだ。なら、幾千もの祈りがささげられても、それを叶えることができるのかもしれない。けれど、仮に六千人が一つずつ何かを願ったとして、それが叶えられたとしても、それは世界にいる人間のうち、ほんの0・0001%の願いしか実現しないことになる。

だから、と僕は言った。

「もし、神に何かを願ったって、それが叶えられたりはしないんだよ」

「でも、その0・0001%に入るかもしれないよ、私たちの願ったことが・・・」

「そうだね」

僕は頷いてから、

「でも、あまり期待はできないと思うのが普通じゃないかな？」と言った。

クリスマスの夜。一般的に聖夜と呼ばれる日に、僕と舞は公園のベンチに座っていた。ちょうど頭の上には大きな楓の木があって、時折吹いてくる風に枝が凧いでは、ザワザワと静かにあたりを震わす。

「やっぱり、智也は夢がないと思う」

そう言った姉さんは下唇を不満そうに持ち上げて続ける。

「どうして、そういうことを言うかな。願ったら叶えられるかもしれないと思った方が楽しいじゃない？」

「そうかな？ そう思ったら、努力しなくなってしまつよ、僕ら人間は」

はあ、とため息をついて見せる舞。呆れたように両方の眉を寄せると、

「それとこれとは別よ。努力は努力でして、願いは願いでしてみる。そして、願いがかなったらラッキーだと思うの。そののどが悪いの？ 何でも平衡をとることが大事なのよ」と困ったように笑う。

それは、まるで母親が子供に教え諭す時のようで、僕は少しだけ自分が恥ずかしくなってしまう。

二人の間を通り抜ける冷たい冬の風。

僕らは身をすくめながら、お互いの温もりを求めて身体を寄り添わせる。

「確かにそれも悪くはないね」

僕がそう言って姉さんが笑う。

「でしょ」

どっちの考え方が正しいのかなんて、分からない。本当は祈りや願いは叶うのかもしれないし、そうじゃないのかもしれない。でも、

舞が叶うというのなら、それもいいんじゃないかという気になる。

全く、一つしか歳はかわらないのに、この差は何なんだろう？

そう思ったら、苦笑が漏れた。

目の前にある公園の噴水には、クリスマスだからだろうか、虹色の照明が投射されていて、小さな飛沫がクリスタルのように輝いて見える。いつも昼間に見かけるとコンクリート色が嘘のように、とても華やかな光で人目を惹きつけていた。

「もう、智也と出会って五年になるんだ。早かったね・・・」

掠れる声と七色に揺れる舞の瞳。僕の脳裏には五年前の、初めて出会った時の姉さんの姿が浮かんで、懐かしいような苦しいような気持になる。だって、きつと僕は舞に初めて出会ったときには、もう恋に落ち始めていたんだと思うから。そう、僕の初恋はずっとあの時のまま続いている。

「はじめまして、皐月舞です。今日からよろしくね、智也くん」

そう言っつて、玄関で手を差し伸べてくれたのは舞だった。当時中学生だった僕は、以前の学校で可愛いと噂されていたどの女の子よりも綺麗な彼女に、ハッキリ言っつてかなり動揺していた。それに、急に聞かされた母さんの再婚にも自分でもわからない苛立ちを感じていた時だった。どうしようもない感情と理性の間で、幼い当時の僕は途方に暮れていたのだと思う。だから、せつかく差し伸べてくれた舞の手を握ることなく、思春期特有の気恥ずかしさと苛立ちにまかせてぶっきらぼうに言っつたのだ。

「はじめまして」とだけ。

新しい親父はできた人で、正直、母さんが惚れるのも無理はないと思った。女手一つで子供を育てることが今の世の中では大変だったことぐらい、分からない歳でもなかったし、母さんが自分の幸せを考えてもいいと僕は思っていた。けれど、頭では再婚のことは納得できていたのだけれど、心は落ち着かなかった。

だから、僕は新しく引越してきた親父の家の中で、物置になっていた狭い三階の部屋を貰うことにした。舞は、自分の部屋と交換することを勧めてくれもしたが、かたくなにその部屋にこだわった。だって、一階の両親の部屋から、一番離れていられる場所だったから。少しでも二人の顔を見なくて済むこの部屋を、好んだのだ。

でも、そんな理由で選んだこの部屋は、案外悪くなかった。なぜなら、一番静かで空が綺麗に見える場所だったから。窓は小さいのが一つしかついてないけれど、そこから見える青は、邪魔されるものが何もなくて格別だったのだ。

「今までこの窓からの景色に気付かなかったわ。智也くんは空とか、好きなんだ・・・」

僕の部屋に来た舞は、そう言って小さく笑った。

「まあね。嫌いじゃないよ」

「私も好きだな、そう言うの」

「姉さんも？」

「ええ」

狭いから、何もない部屋。小さなテーブルとベッドと本棚。コンポやCDはもちろんなくて、生活感のほとんどない部屋だったけれど、僕は結構気に入っていた。

そのベッドに二人で腰かけて話をする。

「きつと、智也くんはすぐに新しい学校にも溶け込めると思うわ。でも、もし困ったことがあったら、遠慮なく私に言ってね。あなたは私の弟なんだから、いつでも助けに行くから」

「うん」

すぐ隣でそう優しく微笑する舞は、当時の僕にとって、とても頼もしく思えたのを覚えている。

今より少しだけ幼い舞。

けれど、僕にとってはどんな大人よりも優しくて大きく見えた。

なのに、素直じゃない僕は、自分でも真っ赤になっているのを自覚しながら『ありがとう』の一言も言えなかった。それでも、気を悪くすることなく手を差し伸べ続けてくれた舞に、僕はとても感謝しているし尊敬もしている。

「あの時は緊張していたのかもしれないなあ」と、隣で虹色の噴水に見とれている舞に言った。

「あの時？」

「そう、舞と初めて会った時」

「突然新しい家族ができたんだから、誰だって緊張するよ」

右の耳に髪をかけながら、彼女は微笑する。

私だって緊張していたんだから。

「でも、僕が緊張したのは、舞のせいだと思う」

だって、と僕は続けた。

「突然綺麗な姉さんができて、しかもあんなに優しかったんだ。声をかけられるたびに嬉しさ半分、恥ずかしさ半分だったと思う」

一瞬舞は、キョトンと何を言われたのか分らないという顔をした後、クシユッと笑って見せて、

「智也くん・・・可愛いね」と言った。

そう、僕は幼くて、未熟で、可愛かった。

それまで、自分の部屋に女の子を呼ぶなんてことがなかった僕は、すぐ隣に座って話をする舞を意識せずにはいられなかった。狭くて倉庫みたいな部屋が、姉さんが来るだけで花が咲いたように明るくなった。彼女から時折する甘い香りに、頭の奥がしびれてしまうような心地の良い痛みがして、穏やかなで澄んだ声に心が大きく跳ね上がった。

「もう、あの時には舞を好きになり出していたのかもしれないし、

少なくとも憧れくらいの気持ちはあったのかもしれないね」

「そうなの」

「うん、きつとそうだと思う。僕の一番の味方は、ずっと舞だし」

「私は」彼女は一度素早く瞬きをして、「・・・私は、智也の良いお姉さんをしてたかしら？ 智也が不安で仕方ない時に、確り支えられたかしら？」と訊いた。

美しい横顔が七色の光を受けながら、僕に問いかける。ザワザワと静かに凧いだ枝をチラリと見上げて、僕はそっと彼女の指を絡めとった。

「僕にはもつたないくらい、いい姉さんだよ。ありがとう」

「ん」

満足そうに微笑する舞。僕はできるだけ優しく彼女の手を握る。まるで、繊細なガラス細工のように、儂く純粋な雪のように、そっと力を込める。

これからは、と舞の瞳を僕は覗く。

「僕が、姉さんを支えるから。今までずっと支えてくれた分、今度は舞の恋人として僕が支えるから」

形のいい彼女の双眸が少しだけ揺らめき、そして、嬉しそうにクシャッと子供のように笑う。

「ありがとう」

もう僕は、あの時の幼い僕じゃない。姉さんにただ憧れて、恥ずかしくて、いつも赤くなっているだけの僕じゃない。だから、今度は僕が姉さんを守らないといけないし、頼ってもらえるように努力しないとイケない。

舞が悩んだ時、迷った時、僕が一番に力になってあげられるようにしっかりとしないではいけない。

ぼんやりと漂う夜の雲を見上げながら、僕は心にそう誓った。

「ねえ、あそこのクレープ屋さんに行ってみない？」

「クレープ屋？」

舞の視線を追うと、可愛い洒落た車を改造したクレープ屋がパステルの屋根をあげていた。よく、遊園地とかでありそうなんだ。

「ね、いこー」

僕の手を引く舞。無邪気に笑う彼女の笑顔がいつまでも曇ることがないように、もっと彼女に相應しい人間にならないといけない。

七色の噴水を背に、僕は空いたもう一つの手を強く握り締めたのだった。

「どうして、外で買ったクレープは家のよりおいしいんだろっね？」

煉瓦作りの歩道を蹴る。僕の隣で機嫌よくしている舞は、先ほど買ったクレープに上機嫌だった。

「さあ、気分の問題かな？」

「あつ、それはあるかもしれないね」

ヨーロッパの街並みを思わせる街燈が影を並べ、こじんまりとした洒落た住宅が軒を差し出していた。僕は一步前にある舞の影の先を見ながらスニーカーを進める。

「智也とこうして二人で歩くのって、いつぶりかな？」

形のいい、飴色の瞳が僕にそう訊いた。

「きつと、数か月ぶりくらいかな」

「だよね、すつごく久しぶりの感じがするもん」

「そうだね」

「智也、大学のレポートとか、講義とか、忙しかったもんね。それに、私も色々あったし」

溜息を吐くように彼女が言って、僕は頷いた。

静かなクリスマス。僕らには何の関係もない夜だったけれど、いつもとは少しだけ違う街の様子は、今日が特別な夜だと思いだすには十分だった。

仄かな明かりと、楽しそうな笑いの漏れるオレンジ色の窓。

イルミネーションでかたどったサンタとトナカイがチカチカと輝いて、ちよつとしたカーニバル見たいだった。

こんな日もいいな。

そう、思えてくる。

少しだけ特別で、幸せな日。たぶん、日頃は過ごすことのできない時間を取り戻している家族も、このオレンジ色の窓の向こうにはいるのかもしれない。

「智也？」

そんなことを考えていると、不思議そうな顔をした舞が僕を覗き込んで言った。

「智也はクリスマスが気になるの？」

「まあ、気にならないっていったら嘘になるのかもしれないけどね。でも、昨日まで忘れていたことだし……。友達も呆れてたくらいだし」

「そう」

フワリと舞うワインレットのコート。カツンと煉瓦をブーツが叩いて、栗色の彼女の髪が曲線を描く。

「クリスマスにデートって恋人みたいね」と舞は言った。

「うん、本当はイブが恋人の日らしいけど」

「そうなの？」

「うん」

それは、昨日七瀬に教えてもらったこと。

それなら、と彼女は続ける。

「一日遅れの恋人の日だね、智也」

飴色の瞳。それが嬉しそうに細められて、ドラマの女優みたいに腰を屈める。だから、なんて絵になる女なんだろうって、僕は思ってしまった。薄い艶やかな唇からは貝のような真っ白い歯がこぼれて、僕はこの世界で一番素敵の人に見とれてしまう。

舞。

僕の姉。

そして、僕の恋人。

僕は彼女のこの瞳が大好きだ。

深くて優しく、どこまでも澄み切ったこの飴色の瞳が。

「智也？」

「ん？」

「どうしたの？」

いつまでも動こうとしない僕を不思議に思っ、彼女がそう訊く。

僕は自分でも苦笑とも、照れ隠しも分からない曖昧な笑みを浮かべながら言った。

「舞に見とれていただけだよ。綺麗だなんて」と。

一瞬何を言われたのか分らなかったのか、動かなくなった舞は、ハッと僕から顔を背けると早足で歩きだした。

カツン、カツン……。

カツ、カツ、カツン。

僕もそれに合わせるように歩幅を広げる。

「どうしたの？」

一歩先に行く舞にそう訊くけれど、まるで僕を無視するように前を見つめて足をゆるめようとしな。

彼女の刻む音に合わせて揺れる栗色の髪。たくさんのイルミネーションの中を弾むように広がって、僕はそれを掴むように伸ばした手で細い肩に触れた。

弾かれたように振り返った舞。

彼女は夜でも分かるくらいに、耳まで真っ赤にしていた。

「どうしたの？」

何度か、瞬きを繰り返した彼女は、少しだけ唇を震わせると、僕にしか聞こえないくらい小さな声で言った。

「恥ずかしいけど、嬉しいの」と。

僕はその瞬間、この胸に溢れんばかりの愛おしさが込み上げてきて、弾かれたように小柄な体を力一杯抱きすくめる。

「キヤ……」

小さな抵抗の音が聞こえたけれど、止まることはない。どうしようもなく愛おしくて、切なくて、胸が痛いくらいに舞が欲しかった。

「智也……」

どうして、この女は僕のことが好きでいてくれるのだろう？ 誰もか振り返るくらい綺麗で、可愛くて、僕には決して手の届かないような人なのに……。なのに、この世界で一番素敵な女性は僕の恋人でいてくれる。

「舞」

「智也……痛いよ」

「うん」

「痛い……」

「うん、ごめん」

腕に込めた荒々しい気持ち静めて、今度は出来るだけ優しく、そつと彼女の背に腕を回す。

「僕、舞のこと、好きだ」

「うん」

それは心の底から絞り出したような言葉。今、全ての人に言ってしまうにかった。この人は、舞は、僕の愛する人なんだって。『彼女』と言う言葉ではとても表現しきれない。あえて言うならば、『運命の人』と言う言葉が一番いいのかもしれない。そのくらい、僕は舞に惹かれている。でも、それは内緒の関係。

「私も、智也が好きよ」

「うん」

クリスマス。

人々に幸せを贈る一年に一度の特別な日。

それはこんな形で僕を幸せにしてくれた。自分には関係のないと思っていた日なのに……僕は幸せだった。

「ねえ、ねえ、智也」

僕の肩に顔を埋めるようにしていた舞が、耳元で、掠れる声で言った。

「雪が降ってるよ・・・」

見ると、ゆっくりと羽のように地上に舞い降りてきている雪。それが舞の肩に止まり、髪に止まり、そして、溶けていく。

「本当だ」

僕らはびつたりと抱き合ったまま、静かな住宅街の角で息をひそめる。まるで、大きな音を立てたら、その儚い存在が壊れてなくなってしまうんじゃないかって思えたから。

「きっと、今、私たちの上を天使が通っているの」

「天使が？」

「そうよ」

舞は何故だか自信たっぷりに頷くと、

「だって、雪って天使の羽みたいじゃない？ それに、雪が降っているのを見ると嬉しくて、幸せになるでしょう？」と言った。

天使の羽・・・か。

そう言ったのは僕だったろうか、七瀬だったろうか？ 初めに言い出したのがどちらかだなんて忘れてしまったけれど、確かに僕は雪のことを天使の羽みたいだと思った。だから、
「確かにそうかもしれないね」と言った。

「あれ？ 智也にしては珍しいのね。いつもなら、こづいづのに否定的なのに」

「そうだね」

確かにロマンティストではない僕だから、いつもならそう言うのには否定的かもしれない。

でも、と僕は言った。

「今日はクリスマスだから、そう思うのかもしれない。だって、こんなにみんなが幸せそうにしている、僕も幸せなんだから。今夜は特別な日だよ」

「そっか・・・」

静かで、寒くて、でも、舞と二人なら暖かくて。

「なんだか、少しだけ恋人の日ってクリスマスが、正確にはイブかもしれないけど、・・・言われる理由が分かったよ」

「私も」

「うん」

僕らはお互いに回していた腕を静かに解き、そのまま指先を絡めるようにして手を繋ぐ。

ひんやりとした舞の手は、手の中にすっぽりと収まる大きさで、その小さな感触にそっと力を込める。

一面イルミネーションに彩られた街を、ゆっくりと歩き出す二人。

今日はクリスマス。

特別で幸せな夜。

でも、僕らはクリスマスチャンではないのだから、慎ましく、この聖夜を過ごそうと思う。

? Rainy Day (1)

*** : **

「サツキ・・・確か、あなたも皐月さんでしたよね？」

「ええ」

「すごい偶然・・・」

そう言っただけ彼女は、可愛らしく小さな手のひらで口元を隠した。

今夜はクリスマス。

僕はクリスマスチャンではないけれど、この教会へと足を運んだ。そこで再開した皐月舞。彼女は昔と変わらない姿で、僕の前に立っている。

「確かに偶然かもしれない。僕と君が同じ姓を持っているのは」

だって、偶然に僕らは姉弟となったのだから。彼女の言った意味とは違いかもしれないけれど、間違っただけではない。

一度、自分の胸に手を当てて、気持ちを落ちつけようと、そっと深呼吸を繰り返す。自分でも緊張しているのが分かってきたから、喉が大きく鳴って、これから言う言葉を頭の中で何度もリピートした。

「そう言えば」その先手を打つように、彼女はおっとりとした柔ら

かい口調で言う。

「私、ちょっと記憶が曖昧みたいで・・・さっき、名前を思い出そうとした時も、すぐに出てこなかったし、どうしてこんな場所にいるのかも分からなくて・・・」

そんなことだろうと思った。僕は彼女の瞳を見つめながら、本当に気になっていいるその言葉を口にする。

「僕の・・・僕のことは憶えていますか？」

「えっ」

一瞬大きな瞳をさらに見開いた舞。高鳴る鼓動。

でも、彼女は小さくかぶりを振ると、

「知っている気はするんです。こう、胸の奥の方があなたのことを感じているみたい。でも、記憶としては、私はあなたを知らないんです」

申し訳なさそうに言う舞。

伏せた睫が蠟燭の明かりで金色に輝いて、白いコートの前で組まれた手が所在なさげに動く。

「いいんです。憶えていなくても」

僕は唯、舞に会えたと言うだけで、十分なのだから。

以前はぴったりと肩を寄せ合っていた僕らの距離は、歩けば数歩

の間隔にまで広がってしまった。何も無いタイルの敷き詰められた床。今は、その空間がひどく遠くに感じてしまう。それでも、こうして再開することができたんだ。もう、二度と会えはしないと思っていたのに……。

だから、それだけで、僕は十分だった。

「私はあなたの家族なんですか？」と彼女が訊いた。

「そうですね。でも、家族という関係は半分だけ正解です」

「半分だけ？」

彼女が僕の答えに眉を寄せる。

「僕と君は姉弟だったけれど、それ以上の気持ちをお互いに持っていました」

「え？」

深く頷いて、飴色の瞳を覗き込む。

大きく見開かれた、それを。

僕の大好きだったその澄んだ瞳を。

ゆっくりと深呼吸をするようにして息を吸い込んだ僕は、この冷たい冬の空気に白い言葉を吐き出した。

「僕と……君は……恋人でした」と。

*
*
*
:
:
*
*
*

? Rainy Day (2)

あの日の夕方は、まるでその時間だけ別の日の空をくつつけたような一変の機嫌の悪さで、レポートの提出に手間取って遅くなった僕を驚かせてくれたのだった。

朝から快晴を疑わなかったのに、急に变化した空模様。当然傘を持ってきてなかった僕は、置き傘を取りに学部控え室に向かった。

ある意味、隔離された研究室にさっきまでいたから分からなかったけれど、こうして校舎の廊下を歩いていると、その薄暗さに時間の感覚さえおかしくなってしまうそうだった。だって、いくら冬と言っても、まだ明るいはずの時間なのに、窓から覗く湿っぽい景色は、すっかりモノクロームに覆われてしまっていたから。

「一段と寒いな」

僕はそう溜め息を零しながら、ジャケットの首元を両手で覆った。進む足も、自然と先を急いでいる。そして、こんな日はマフラーをしてこなかった今朝の自分を後悔する。

暗い校舎と灰色の空。

それは寒い冬の夕方を、もっと憂鬱にしてくれるものだった。

やっと長い階段を往復してたどり着いた広い校舎の玄関口は、強く降り付ける雨音に溢れていて、湿っぽい匂いが香水のようにムッと胸を詰まらせる。

本当にひどく憂鬱だ。

この雨の中を、両肩を小さくしながら帰らないといけないのか・
。。

暗い空に溜め息一つ。重たい灰色がもつと重たくなる。

このいつ止むとも分からない雨が上がるのを、少しだけ待ってみようか、ほんの一瞬だけ考えて傘を開いた。だって、明日になったとしても、決して止みそうにないくらい、勢いよく空は泣いていたから。

「ねえ」

たぶん、靴の半分くらいは、雨の中に踏み出していたと思う。

振り返った僕を追い越すようにして、彼女は傘の中に入ってきた。長目のポニーテールが、この空模様にな似合いなくらい元気に揺れて、ふわりと甘い香りが僕の鼻腔をくすぐった。

「傘、忘れちゃったの。入れてくれない？」

七瀬は形のいい眉を片方だけ上げてそう言った。

「うん、いいよ……」

苦笑して二人で入るには小さい傘の半分を差し出す。

「ありがとう」

並んだ七瀬の頭は、僕の肩くらい。楽しそうに雨の中に踏み出す彼女につられるようにして、一步、また一步と灰色の空の中に僕は踏み出していった。

「全然雨が降りそうじゃなかったのにね。朝あんなに晴れていたから、いつもよりも薄着だし・・・本当にサイアク」

「本当に」

肩をすくめながらそう僕は合図地を打つ。

彼女の言う通り本当に最悪。もし、天気予報の意味があるとすれば、こんな誰もが予想できない日のためだろう。なのに、こういうここ一番の場面でことごとく予報を外して、どうでもいい日に何割かしかない正解率を使ってしまっているような気がする。

そう言った僕に、彼女は声を出して笑うと、

「それって、予報士さんたちに悪いよ」と言った。

いつも人通りのそんなに多くない道。小さな店が慎ましく営業していて、寂れているわけじゃないけれど忙しいわけでもない通り。でも、今日は激しい雨のせいで僕ら二人以外は誰もいなかった。店の明かりも幾分、この激しい雨の中でぼやけて見える。

透明な雨と、湿っぽくて甘い香り。

それは隣を歩く七瀬の匂いなのだろうか？　僕はこっそりとその香りを追う。

「ねえ、皇月くんは雨・・・嫌い？」

「え？」

彼女は自分の足の先を見るようにしながら、もう一度僕に訊く。

「雨は、嫌い？」

私は、雨、好きなんだ。

うつむいた七瀬はそう言った。

「僕は好きじゃないかも。だって、こつやって雨が降ると寒いしさ」

「そっか」

「うん」

パシャッと、音がして、僕らの靴が水たまりを蹴る。

煉瓦の隙間を縫うように細い水が流れて、坂の下へと。

「どうして、七瀬は雨が好きなの？ 雨を喜ぶ人ってあんまり見ない気がするけど」

「そっだね」

彼女は両手をコートポケットに突っ込んだ格好で、大きくブーツを踏み出して言った。

「だって、静かなんだもん」

「静か？」

「そう」

「雨が降って、こんなに音がしているの？」

「そう」

雨音は心を静かにしてくれるの。穏やかだった方がいいかもしれないけれど。

そう彼女は笑った。

傘に当たる透明な雫。絶え間なく続く音の連鎖は、空が灰色である限り止むことはない。僕は半分の肩を濡らし続ける雨を視界の隅に捉えて、

「やっぱり、僕は、雨は嫌いかもしれない」と溜息を吐いた。

「そう」

二人の男女に、一つの傘。やっぱり、七瀬は小柄だったけれど、二人で入るにはこの傘は小さくて、僕の右半分は空の下にさらされていた。奪われる体温に体はどんどん冷えていく。

「ねえ」と彼女。

「何？」

「臯月くんの好きな人って・・・誰？」

カツンとレンガを蹴る音が規則正しく雨音の中で響く。

カツン、カツン。

カツン、カツン・・・と。

僕はチラリと整っている七瀬の横顔を見ながら、

「七瀬の知らない人だよ」と言った。

「そっか」

それならさ、と彼女は続ける。

「その好きな人に告白は、したの？」

感情の見えない白い横顔。うつむいた前髪に少しだけ雫が止まって、震えて、落ちていった。

「いや、僕の片思いだから」

嘘を吐いた。

「そうなの」

「うん」

「それならさ」と彼女は言った。「告白、してみたらいいじゃない。イブの日に、私に言ったみたいだ。言わないと分からないこともあるわけだし」

「そうだね」

「だから、言ってみるだけ、言ってみたら？」

小さく頷いて、そうしてみるのもいいかもね、と僕は言った。

早まる雨の勢いは、空が暗くなっていくにつれてますます激しくなり、履いていたスニーカーはすっかり水をかぶってしまった。ぐっしょりと濡れた右の肩がやけに重く感じる。

「あそこで、ちょっと雨宿りしない？」

吹き付ける霧を含んだ風に顔をしかめながら、七瀬が小さなバス停を指さした。ちょうど店の途切れた場所に作られた、緑の屋根の慎ましいバス停。僕は駆けこむようにしながら、その囲いの中に入った。

「ここなら、少し休むにはいいかも」

「そうだね」

中に備え付けられたベンチに鞆を放り出して、溜息をついた。目の前を斜めに落ちていく雨の線が、視界を遮ってしまうほどに今日の天気は強烈だ。

「臯月くん・・・肩」

彼女は僕の肩がぐっしょりと濡れているのを見つけると、大きな瞳を丸くして、慌てて自分の鞆からハンカチを取り出す。

「私を濡れないようにしてくれたからだね」

「僕は濡れても風邪引かないから、自分を拭きなよ」

押し当てられたハンカチを返しながら、そう言った。彼女だって、やっぱりこの雨の中では濡れてしまっていたから。

「ほら、なんとかは風邪引かないって言うじゃん」

「そんなこと言って、馬鹿じゃないでしょ？ 臯月くんは」

「そう？」

彼女は僕の軽口に真剣に頷くと、

「だから、風邪、引いちゃうよ」と言った。

湿っぽい雨の日特有の香りが、まるで香水のようにあたりを包んでいた。そして、そこら中の道路は、急に降ってきた大雨を受け止めて、池のようにうっすらと水を張っている。その表面を叩きつけるようにして降ってくる、雨、雨、雨……。

僕らはモノクロームの世界に置き去りにされてしまったかのように、誰もいないバス停で佇んでいた。

「そう言えばね」

彼女は少しの間の沈黙をかき消すように、ポツリとそう言った。

「臯月くんは人魚姫のお話、知ってる？」

「大雑把なら」

「そう」

それなら、と真っ白な横顔で彼女は訊く。

「人魚姫が最後、泡になって消えてしまうのは知ってる？」

「うん」

「あれって、どうしてなんだろうね？ 別に恋が実らないからって、泡になることないと思わない？」

「まあ、そうだね」

確かに言われてみれば王子様に愛されなかったからと言って、泡になって消えてしまうというのは、物語特有の大げさな設定に思える。

「私はずっと不思議に思っていたの。どうして、人魚姫は泡になったのか・・・」

「でもね、私、分かったような気がするの」

「どうして？」

「たぶん・・・」

雨で冷たくなった体を抱きかかえるようにして、両手を組む七瀬。

「人はたった一人のヒトを愛するように、運命で決められているからだと思っ」

「そう?」

「だから、人魚姫は泡になったんじゃないの。きっと運命の恋が叶わなくて、歳をとって、普通に死んだの」

それは、と彼女は言った。

「泡になって消えてしまうよりも悲しい」

叩きつけるように斜めの線を描く雨。吹きつける風は湿っぽく、煉瓦を伝う雨の甘い匂いが鼻についた。

「叶わない恋に指を啜えて老いて行くくらいなら、一瞬で消えてしまった方がまし……。だから、綺麗な終わり方に物語はしたんだと思っ」

「そう?」

彼女がどうしてこんな話を始めたのか、全く分からなかった。僕は本当にこういうことには鈍感で、彼女の気持ちにさえ気づこうとしなかったから……。いつになく真剣な瞳が上目に僕を見て、彼女の色みの薄れた唇が震えていたのに、僕はそのサインをずっと見逃していたのだ。

「他に好きな人が、人魚姫もできたか……」

だから、そう言いかけた瞬間、全部の時間が止まってしまったか

のように思えた。

斜めに降ってくる雨も、バス停の屋根を打つ雨音も、風も、そして、僕らも。

だって……。

七瀬が僕にキスをしていたから。

いっぱい背伸びをした彼女が、僕のジャケットを引っ張るように掴んで、雨で冷たくなった唇を重ねる。湿っぽい七瀬の味とひんやりとした感触が喉をくすぐり、ただそれを意識した熱が鼓動を振動させる。

カッン……。

僕の頭一つ小さい彼女は音を立てて踵を下ろすと、潤んだ瞳を銀色の睫毛で隠して、

「ごめんなさい」と小さく言った。

モノクロームの世界。取り残されたのは僕と七瀬。

どつちやら、今日の雨はまだ止んでくれそうになかった。

? R a i n y D a y (3)

「じゅめん・・・」

そう言ったときの彼女の瞳を、僕は一生忘れることはないと思う。ピクツと痙攣するように目じりが動いたかと思うと、今にも泣き出すんじゃないかってくらい、悲しい瞳が覗いたから。

でも、その悲しさはすぐに彼女の瞼に隠されて、次に開いたときは、僕にも分ってしまうくらいギリギリのプライドで溢れていた。

「何て言えばよかったんだよ」

ベッドに背中を預けて天井を見上げる。

目の前には、四角い真っ白な天井しかないのに、目に浮かぶのは七瀬の顔ばかりだった。あの瞬間の、傷ついた、どうしようもなく悲しそうな、今にも壊れてしまふんじゃないかってくらい揺れる瞳が鮮明に浮かんでくる。

「私、何やってんだろう。今の忘れて。臯月くんに好きな人いるの、聞いたばかりなのに」

彼女はそう言うと、いつものように笑ったつもりだったのだろう。でも、七瀬と一緒に時間を過ごさすぎていたのかも知れない。ほんの少しだけ彼女の声が震えているのに、僕は気づいてしまった。それは本当にギリギリのライン。

「じゃあ、また明日ね」

そう言って彼女は雨の中へと、僕の返事も待たずに駆け出して行った。いつもなら、二人の家の分かれ道まで一緒なのに、彼女はモノクロームの世界に飛び込んで、僕をバス停に置いて行ってしまった。

小さな背中だった。

斜めに降る雨に打たれながら、黒いポニーテールが揺れていた。そして、細い肩が震え、遠ざかっていく足音が雨音の中でやけに大きく響いていた。

僕はしばらく切っていない髪を片手で掴み、無造作にひっぱる。ギシツという音が背中からして、ベッドに軽く押し返された。

「もっと早く七瀬の気持ちに気づいていれば・・・」

その想いは、彼女の背中を追いかけることができない自分への後悔なのかもしれない。けれど、他に何ができたっていうのだろう。今思うと彼女からのサインはいくらでもあったのだけれど、僕は舞との関係に浮かれていたから、気づこうともしなかった。

「くそっ」

吐き出した溜息が、冷たい部屋の空気に触れて白く立ち昇っている。そして、まるで僕の鈍さをあざ笑うように、くるりと一回転して、蛍光灯の中に消えた。

このどろりとした黒い感情は何だろう？

悔しさだろうか？ 苛立ちだろうか？

でも、それは何に對して？

僕の自問はとめどなく続き、僕自身を責め続ける。もっと早く七瀬の気持ちに気づけていればと。

でも、果たして気づいていたからと言って、僕は今の状況を回避できたのだろうか？ いや、それは無理だったような気がする。分かっていても避けられないこともあるのだ。

「なら、どうしたらよかつたんだよ・・・」

こつやつて螺旋を描き続ける問い掛けが、また七瀬の後姿を思い出させ、僕は抜けられない不安定な感情から、苛立ちをまた一つ受け取ってしまう。蛍光灯の明かりに向かって手を伸ばし、その輪郭がぼんやりと赤みを帯びるのを見つめる。

七瀬は僕が好き。僕は舞が好き。舞は僕が好き。

だから、僕と舞は恋人で、僕と七瀬は友達だった。

でも、七瀬と僕は他人で、舞と僕は姉弟。それならば、本来恋人になるのが自然なのは七瀬なのだ。だからもし、舞と僕が出会っていなければ、僕は七瀬と付き合っていたかもしれない。それは、誰にも責められず、隠さなくてもいい普通の恋で、きつと七瀬はいい奴だから、それなりにうまく行ったかもしれない。

けれど、僕と舞は出会ってしまった。

それは偶然だったけれど、その偶然が、僕が彼女に恋をするという必然を作ってしまった。それは避けられないことだ。

「考えていてもしょうがないな」

僕は上半身を起こすと、自分の膝を見る。

考えても仕方がないことを考え続けても、それは意味のないことだ。どうせ、彼女とは明日顔を合わせないといけないのだから、その時、成るようになるだろう。

『じゃあ、また明日ね』

そう言った彼女の声が、聞こえたような気がした。

? Rainy Day (4)

ところが、七瀬の言った『明日』はそれからなかなか訪れなかった。なぜなら、僕と七瀬はあの日からしばらく顔を合わせる事がなかったから。お互いに故意に避けていたのではないと思う。でも、どこか心の端の方で、僕は彼女の顔を見ることを恐れていたのかもしれない。七瀬の方も同じだったのかもしれない。だから、その『明日』がやってきたのは、本当に突然のことだった。

「あつ、皐月くん・・・おはよう」

お昼がもう半分以上は過ぎていたから、「おはよう」というより「こんにちは」だと思ったけれど、

「うん、おはよう」と、僕は彼女につられるように返事をした。

学内のちょうど三階と四階の間。中三階とでも言った方がいいだろうか。そのちょうど階段と階段の間の小さなスペースで、僕らは突然に出くわしてしまった。大きな窓から取り込まれる太陽が作った長方形の光のタイルが、二人の影に切り抜かれるようにして灰色の床に浮かんでいた。

「元気、だったかな？」

はにかむように、気まずいこの雰囲気はどうにかしようと言葉を続けたのは、やっぱり彼女の方だった。

「うん、まあ・・・七瀬は？」

「うん、私も何とか元気・・・かな」

いくらかの沈黙が、少しだけやつれたような気のする七瀬の表情に気付かせる。でも、僕はそれを無視して、
「ならよかった」と微笑した。

実際、自分でも、何がいいかなんて分からなかった。でも、僕は
そう言う以外、他に言葉を持っていなかったから、小さな声でそう
言ったのだ。

階段を降りてきた何人かの生徒が、笑い合いながら僕らを避けて
いく。一人の女子生徒の陽気で甲高い笑い声に、何故だか苛立ちを
感じた。

「あのね」と彼女は足元に視線を落として、「この間のことだけど、
もう忘れてくれないかな。皐月くんが好きなのがいたことは、知っ
ていたしね。私も忘れるようにするから」と言った。

陽だまりでできた光のタイル。その中で彼女の小柄な影が揺れる。

「それでいいの？」

「うん」

チラリと視線を僕に向けて、だって、と彼女は呟く。

「この間のことで、ここのところ皐月くと気まずくて、いつもみ
たいに話も出来なくて……。でも、それって嫌なの。自分からキ
ス……。しといて、こんなこと言うのもアレだけど、前みたいに普
通の女友達として仲良くしてくれないかな？」

見上げる瞳が僕を捕え、なんとなくそれが儂い物のような気がした。瞬きが繰り返されるたびに揺れる瞳が切なく思えて、そういう表情をさせてしまっているのが自分自身、と言う事実悲しくなる。

「きつと私はあなたの友達に戻れるから」

そう言った彼女が、今にも泣きそうな小さな子供のように金色に輝く睫毛を揺らしたから、僕の心はよく分からない鈍い痛み、キリキリと音を立て始めた。

「だから、私を恋人でなくてもいいから・・・傍に居させてくれな
い?」

僕の目の前に立つ七瀬は、黒くて長いポニーテールを冬の太陽に晒して、答えを待っている。

どうしてだろう? 彼女は どうして僕なんかを好きになったのだろう? 気さくで、話しやすく、明るくて、優しく、可愛くて、綺麗で。そんな彼女が僕を好きだと言う。今まであまりに近くに居過ぎたせいで気付けなかった七瀬の気持ち。彼女は隣を歩いて家に帰るとき、一緒に話をするとき、学食で騒ぐとき、ふざけ合っ
て笑う時、講義で視線を合わせるとき、どんな気持ちで七瀬はいたの
だろう?

「嫌かな?」

沈黙に耐えかねた彼女がそう言った。チラリと舞の顔が浮かんで、僕はそれに言い訳をするように、友達として付き合っただけだから、
と言いつける。

だって、今までもそうだったのだから、別にやましいことをして

いることにはならないだろう？」

彼女は僕にとって大事な友達で、舞は大事な恋人。七瀬もそれでもいいと言っているし、何も悪いことはない。だから、

「分かった。七瀬は今でも大事な友達だと思っているから・・・これから今まで通り接するよ」と僕は言った。

「うん、ありがとう」

ホツとしたとでも言うように、コート越しに胸をなでおろした七瀬。なのに、浮かべた微笑は今にも消えてしまいそうに、引き攣ったままだった。それは七瀬の精一杯の優しさだから、僕はわざと気付かないふりをする。

「それじゃ、私、次の講義があるから」

そう言っつて右手を上げると、彼女は僕を追い越して太陽が作り出す光のタイトルの端に消えた。日の光が届かない下への階段。彼女は一歩一歩ブーツを進ませ影の中に消えようとしていた。

「ねえ、臯月くん」

「何？」

「臯月くんって、『誰にでも優しいのは、誰にも優しくないと同じ』ってこと、分かってる？」

「え？」

弾かれたように振り返る僕。階段を降りようと、次の段に足をか

けた格好の七瀬がまぶしそうに僕を仰いでいた。影に沈んでしまった表情は僕からは読み取れなくて、唯、その細められた瞳が猫のよう輝いて見えた。

「なんでもない。今のも忘れて」

「でも・・・」

「聞こえてないならそれでいいの」

彼女はそう言って長いポニーテールを揺らしながら階段を下りて行った。陽だまりのタイルに残されたのは僕の影。四角い窓から差し込む太陽の光を手のひらで遮って、青い空を眺める。

「『誰にでも優しいのは、誰にも優しくないと同じ』かぁ」

溜息が言葉の端と一緒に出て、七瀬の後姿を思い出す。僕は彼女の小さな背中にとだけ助けられているのだろう。今回だってそうだ。本来ならば、僕の方から声を掛けるべきだったかもしれないのに、先に言葉を発したのは七瀬だった。

もし、舞に振られたとして、僕は七瀬のように強張った精一杯の笑みを浮かべて、友達として付き合う道を選ぶことができるだろうか？ たぶんそれは、心が引き裂かれてしまうほど残酷で悲しいことだろう。舞が僕に優しくする時も、怒る時も・・・誰かと恋に落ちる時も、別れる時も、いつだって自分が彼女に振られたんだってことを考えてやっていくなんて、考えただけでもゾツとするくらい辛いことだ。

しっかりと聞こえてしまった彼女の残した言葉は、その辛さから

生まれる小さな復讐なのかも知れなかった。

「人魚姫は、本当の運命の相手を見つけることができたと思うよ」
そう信じたかった。

うぬぼれもいいところだと思っけれど、本当にそう思わずにはいられなかった。きっと僕よりもいい男が彼女を幸せにしてくれて、あの引き攣った笑みを懐かしく語れる日が来ると。

高い冬の空を見上げた僕は、いつまでも七瀬の眩しそうに細められた瞳を忘れることができずにいた。

? memories (1)

*** : **

皇月舞という女性は、客観的に見て、『魂のひどく美しい人』だった。容姿が美しい、雰囲気優しい、声のトーンが柔らかい。要素としては色々あるかもしれないけれど、そのすべては要素でしかなく、舞と言う人物を評するのに相応しい言葉ではなかった。だから、僕は彼女がどんな女性かと訊かれたら、そのどれでもなく、唯『魂のひどく美しい人』とだけ答えると思う。

一度、舞に直接そう言ったら、キョトンと瞳を丸くして、「それってすごくキザなセリフね」と言われてしまった。

けれど、やっぱりお世辞や誇張を抜きにして、舞は『魂のひどく美しい人』なのだ。少なくとも僕はそう信じて疑わない。

「私は、あなたのことを愛していたのですか？」

「そうです」

「あなたも私のことを愛していた？」

「ええ」

座席の間の中央通り。くすんだ赤のタイルの敷き詰められた先に佇む彼女は愛らしい小さな顔を斜めに傾けて、僕の言葉を思案していた。

『僕と君は恋人でした』

そんなことを言わないといけない日が来るなんて、あの当時の僕は想像さえしなかったろう。唯、彼女が傍にいてくれれば幸せだったあの日。あれから、全てが夢だったのじゃないか、と思えるくらい時間が流れてしまった。

「そうですか。でも、どうして私とあなたは姉弟なのに、恋人になつてしまったのでしょうか？」

「それが運命だからだと思います」

「運命？」

「そう。偶然が必然を呼び、必然が偶然を呼んでしまった。そして、僕らは何度でも同じ選択をしたでしょう。人はそれを何と呼ぶのかわからないけれど・・・僕は運命だと思います」

「そうですか」 彼女はその澄んだ瞳をスタンドグラスの光に輝かせて、「確かに、私には記憶がないけれど、色々あったような気がします。悲しいことも、嬉しいことも、辛いことも、幸せに思えることも・・・本当に色々とあなたと経験したような気がします」と言った。

蝋燭の光が揺れる。チラチラと輝く光は静かで、音のないクリスマス夜の夜を一層静かな場所に使っていた。その中に佇む僕と舞。彼女は真っ白なコートを着て、僕が知っているままの微笑をこぼす。

「何か、話を聞かせてくれませんか？」

「話？」

「そう、私たちのことを」

彼女は祭壇の土台にゆっくり腰を下ろすと、僕に隣を促した。どこか懐かしさを感じながら、その場所へと近づいて行く。

「ずいぶんと長くなってしまっけれど、いいのかな？」

形のいい瞳が瞬き、

「クリスマスの夜は長いですから」と微笑する。

「そう」

じゃあ、何から話そうか……。

僕はしばらくぶりに彼女の隣に腰を下して、その小さな微笑に応えた。

「君が、どんな人かと訊かれたら、きっと僕はこう答えると思う……」

あの時のようにゆっくりと流れる穏やかな時間を感じながら、二人の話を君に聞かせよう。すべてを君が忘れてしまったとしても、僕は確りと憶えているから。決して楽しいばかりの日々ではなかったけれど、それでも二人の物語には変わらないのだから。

そう……、君は……

「魂のひどく美しい人だった」

*
*
*
:
:
*
*
*

? memories (2)

冬の夜。風のない、静かな夜。きっと世界に存在しているのは、僕と舞だけなんじゃないだろうかって思えるほど、優しく寂しい夜。金色に輝く月が澄んだ光を投げて、星がそつと僕らを見ていた。

「智也？ 寒くない？」

そう言っつて、お互いの間にあつたほんの数センチの隙間を埋める舞。僕は微笑を浮かべて、彼女の肩を抱き寄せた。

「こうしていれば寒くないよ。たぶん、ここがもつと寒い国だったとしても、舞といれば暖かいと思う」

「私も。たぶん智也と一緒になら、どこだつて一番居心地が良くなるような気がするから」

流れるように曲線を描いた髪を右耳に掛けながら、彼女はそう言っつて笑みを浮かべた。

どこにいてもお互いが傍にいれば、そこが一番心地の良い場所になる。そんなことを思える二人は、世界にそう多くはないのかもれない。だから、今、僕らがその完成された関係であることを感謝しないといけないし、大切にしないといけない。

隣を見ると、月の明かりで金色になった睫毛を瞬かせながら、形の良い飴色の瞳が揺れていた。

「どつしたの？」

そう僕は擦れたような小さな声で訊く。

「智也はどこか行きたいところってある？」

「行きたいところ？」

毛布を胸に抱き寄せると微かな衣擦れの音がして、彼女の少しだけ湿った髪からシャンプーの甘い香りがした。

「寒い国、温かい国、海に囲まれた国、山の多い国、古い国、新しい国……。いろんな国が世界にはあるけれど、どこか行ってみたいところはある？」

指を一つ一つ折りながらそう舞は言った。

「舞と一緒になら、どこでも楽しい気がするけれど……。やっぱり海の綺麗な国がいいな」

「そっか。智也は海、好きだもんね」

「うん。舞は？」

楽しそうに瞳を瞬かせて、彼女は頭を僕の肩に載せた。

「私は自然の綺麗な国かな」

「アイスランドとか？」

「あんまり寒い処も困るけれど、空気が澄んでいて、空が青くて、

食べ物がおいしくて、住んでいる人が優しい国に行きたい」

「結構贅沢だね」

僕の感想に声を上げて喜ぶ舞。

「要望は多い方が楽しいじゃない」

嬉しそうな笑い声が狭い部屋に広がっていく。そして、僕もそんな舞につられて、なんだか楽しくなってしまう。

一つしかない窓の外。一見すると、壁に飾った一枚の絵画にも見える長方形に切り取られた外の世界。そこから、淡い雲をまといながらも、澄んだ光が優しくこの場所に差し込んでくる。目を凝らして見ると、月の周囲だけ空が色を変えているような気がする。ぼんやりと、何色かは分からないけれど……。

「世界には、私たちだけ……」

外の景色に見とれていると、ポツリと、舞がそう言った。

「なんだかこうしていると、世界の終りの日みたいに思えてこない？」

だって、と彼女は続けた。

「外は真っ暗で、物音もしないし、誰の声も聞こえない。あるのは智也と一緒にいるこの部屋だけ。だから他の全てがなくなっていたとしても私達は気付かないかもしれない」

「舞は不思議なことを考えるよね」

「そう?」

白い横顔が窓の外を見つめていた。僕は彼女の視線を追うようにして、目を凝らして見るけれども、一体彼女が何を見ているのかは分からなかった。だって、きっと彼女はそこにはないものを見ていたのだろうから。

「もし」と舞は言った。「もし、神様がいるのなら、こんな汚い世界は滅ぼしてしまいたいと思ってるはずだわ。そして、もっと優しくて他人の痛みを分かかってあげられる人ばかりが生活する世界を作りたいと思っているの」

「そうかもしれないね」

僕は小さく同意する。

「死ぬことも、病気になることも、怪我をすることもない。そして、心を傷つけられない世界。そうすれば、誰も泣かなくていいし、温かく笑って暮らせるのかもしれない」

「そんな世界があつたら、舞は行きたいの?」

「分からないわ」

だって、そんな世界は知らないもの。

その時の舞の横顔はとっても綺麗だった。凜とした強さと哀しい弱さが同時に存在していて、どこかを見つめる視線は真剣で柔らか

った。たぶん、彼女が神様だったら、誰も傷つくことのない温かくて優しい世界を作るのだらう。でも、

「私には智也がいるから」舞は月の澄んだ光を浴びながら、「だから、ここが私のいるべき場所なの。他のどこでもないここが、私のいるべき場所」と言った。

「うん。そうだね」

たとえ、天国があつたとしても、楽園があつたとしても、二人のうちどちらかが欠けてしまふなら、そこは僕らのいるべき場所ではない。

舞が体の向きを変え、その拍子にヒンヤリとした冷たい空気が毛布の中に流れてくる。回された腕に彼女の温もりが感じられ、僕らはお互いがお互いを温めるように体を寄せ合つた。舞が僕の腕を心細そうにギュツと抱き、その拍子に彼女の髪が、着ていたシャツ越しに、胸のあたりに流れ込んできた。

「月はずっと私たち人を見てきたのね」

「うん。そうだね」

「色々な国を、時代を、人を見てきて・・・こんなに汚れてしまった世界をどう思っているのかしら？」

いつも何も言わず、唯、夜が完全な闇に呑みこまれないように照らし続けてくれる月。時に人は泣きながら、笑いながら、怒りながら、真剣に、冗談交じりに月に向かって願いをし、相談をし、心の内を語ってきたのだらう。その度にこの静かな夜の母は、その静寂

ゆえに多くの言葉を受け止めてきたのだろうか。

そう考えると、何だか哀しくも優しい気持ちになる。

「きつと僕らみたいに、秘密の関係を続ける恋人達も、見てきたの
だろうね」と僕は言った。

舞は小さく頷くと、

「そうね」とだけ言って窓の外を見ている。

たぶん、舞は僕にとって月のような存在だと思う。夜のように、
暗い悲観的な世界にあって、心地の良い慎み深い月明かりのように
そっと包んでくれる。どんな時も彼女の傍にいれば、僕は落ち着い
ていられた。そして、これからどうすればいいのか、どこに行けば
いいのか気付かせてくれる。舞はそういう存在だ。

「たぶん、僕は舞に相応しくないのかもしれない」

そうポツリと言葉が零れた。とても自然に、違和感なく。

「そんなこと・・・」

眉を寄せて何かを言おうとした舞の薄い唇に人差し指を当てて、
「分かってる。それでも僕は舞から離れるつもりはないし、離す気
もないよ。ただ、やっぱり僕はまだまだ舞に相応しい人になれるよ
うに頑張らなくちゃいけないね。もっと、舞が頼れるような大人な
男にならなくちゃいけない」

だって、と僕は続ける。

「月だって、傍には星が輝いているだろ？ きっと月が多く的心を受け止めてきたのと同じように、星が月の心を受け止めてきたんだと思う。だから僕は、舞にとって星のようにいつも傍にいて支えられる人にならなくちゃいけないと思うんだ」

「今でも十分だと思うわ」

僕は彼女の瞳をまっすぐ見つめて、

「これからもずっと、舞からそう言ってもらえるために」と笑った。

小さくクシュツと微笑してそれに応えてくれる舞。

今の僕にはその笑顔があれば何だってできる気がした。将来なんて不確かだと言うけれど、僕にとってずっと舞と一緒にいることは変わることはない未来で、その未来を得るために払う努力が何であつても、少しも惜しむことはないのだ。この先ずっと、舞が僕を愛してくれるのなら。

そう、死が二人を分かつまで……。

カタカタと夜を切り取つた窓が揺らされ、屋根越しに勢いよく風が通つたのが分かつた。僕は胸を流れる艶やかな栗色の髪を指先ですくつて、

「今度、旅行に行ってみない？」と訊いた。

「旅行？」と舞が首を回して僕を見る。

「日帰りでもいいからさ。誰にも遠慮する必要のない処に、舞の好きな自然を楽しみに二人で行かない？」

長い睫毛が何回か瞬いて、飴色の瞳が嬉しそうに揺れる。

「智也と一緒に旅行かぁ。・・・いつにする？」

「今度の週末にでも早速。場所は僕がいくつか候補を挙げておくから・・・」

「それはとっても楽しみなね」

そう言って微笑する。

カタカタと窓ガラスが冷たい風に揺れ、どこからか葉のざわつく音が微かに聞こえてくる。狭い部屋には僕と舞。きつと世界は滅びてしまつて僕ら二人だけしかいないのかもしれない。そう思つてしまふほど静かな世界で僕は彼女に応えて微笑する。

絵画のように切り取られた夜の景色が、薄い光で僕らを見守っていることを感じながら。

何でもないことが気になって眠ることのできない夜。妙に冴えてしまった瞳をなごり惜しくこすりながら、そつとベッドを抜け出した。初めはトイレにでも行って、また眠る努力をしようかと考えていたのだけれど、静まり返ったりビングに足を踏み入れたとたん、なんだか寝るのがもったいなく思えてしまった。

色のない、モノクロームの世界。

ひっそりと息を潜めているかのように、自分の発する衣擦れの音と微かな呼気の音が響いていた。

そして、そつと差し込んでくる月の光。

いつもと違う、見慣れているはずの自分の家が、じつと僕を見つめている。そう感じた瞬間に、心臓がギュツと締め付けられるような心地のよい痛みを発し、それに促されるように僕は急いで部屋に戻っていた。

白いシーツの中で、寝息を立てる舞。

彼女を視界の端に捉えながら、できるだけ音を立てないようにジーンパンに足を通し、ジャケットを羽織る。

ドアを閉めるときは出来るだけそつと、そつと……。

こうして、夜の街に足を踏み入れた僕は冷たい外気に上気した頬を晒して、ふと、視線を上にあげてあることに気付いた。

「意外と明るいんだ」

とたんに白い吐息がクルリと月光の中を踊り、後形もなく消えてしまった。街灯の少ない家の近所は真つ暗だと思いきや、意外なほど明るくて、それに今まで気付かなかったことが本当に不思議なほど、辺りは優しい光で照らされていたのだ。なんだかそれに気付いたことが嬉しく思えて、幾分軽い足取りでスニーカーを進め始める。

時折、蛍光灯の明かりに照らされた自販機や、西洋の趣向を凝らした街灯があつたけれども、ほとんど、光という光は月と星だけだった。

なんて、特別な夜なんだろう。

そう感じずにはいられない。

途中、あつたかい飲み物で体を温めようと、自販機のボタンを押したら、あまりに大きな音を立てて缶が落ちてきたから、僕はその不躰な音にこの夜の街が目を覚ましてしまっんじゃないかって気にさえなつた。

そんな、本当に静かで優しい夜。こういう時間が自分のすぐそばにあることを知らなかったことが、なんだか損をしていたような気さえしてしまう。

大きくて丸い月を眺めながら、目的もなく、なんとなく気の向くままに足を進め続けた。それは、見慣れた街が別のものに変わつたような感覚。絵本の中の一ページのように、不思議で、ちよつとだけ物悲しく、でもわくわくしてしまうようなおとぎの国だった。

そうやってどこに行くでもなく進めていた足は、いつの間にか海岸に向かっただけで、気付くと潮の香りが辺りに満ちていた。時刻は真夜中。朝の太陽が顔を見せるにはまだ早すぎる時間だ。

防波堤の隙間に作られた階段に腰をおろして、唯、潮の香りと波の音が聞こえるだけの真つ黒な海を見つめることにした。水平線に大きな月が、どこまでも続く光の道を一筋、闇に沈んだ海につくりだしている。風はほとんどなく、人もなく、物もなく……。目の前にあるのは穏やかに凪ぐ海水の満ち引きの気配。

そうしていると、ちょうど……。あの日もこんな海を舞と一緒に眺めていたと、ふと目の前の景色が記憶の深い処を探り出した。もう、ずいぶんと昔のことのような気もするし、つい昨日のような気もする。あれは僕と舞が『恋人』という関係になった日のことだ。

過去の記憶は『二年前』。

始まりは僕が高校二年、舞が三年の記憶。

あの頃、皐月智也と舞は血の繋がっていないことと、その為に普通の姉弟よりも幾分仲の良いことを除けば、いたって一般的な『家族』という言葉で表現される関係だった。それが変わってしまったのは、果たして僕らにとって良かったのか、悪かったのか、正直、素直にそれを喜んでいいのか、きっかけになったことを思うと今でも迷っている。

当時、バスケット部に入っていた僕は、冬の大きな大会を間近に控えていた為に、毎日遅くまで練習していた。まあ、三年の引退試合と

言うことなので、彼らのピリピリしたムードを受けて僕ら二年生も付き合わされていたと言ったところだろう。とにかく、僕は家に帰るのがこの時期は遅かった、ということだ。

もう、すっかり暗くなった道をジャケットに両手を突っ込んだ格好のまま、マフラーに顔半分を埋めて足早に家へと急いでいた。今でも憶えているのは、煉瓦で造られた歩道を照らす街灯の一つがチカチカと消えかかっている、その下にチェック柄の赤いハンカチが落ちていたことだ。誰かに踏まれたのかもしれないそのハンカチは汚れていて、もう二度と持主の手元に返ることがないとするれば、それはそれで可哀想なものだと、練習で疲れていた僕は何気なく思ったのだった。

家へ帰ると、いつものように晩御飯の匂いが玄関まで香っていて、練習でお腹を空かせていた僕はすぐにリビングに向かった。

蛍光灯の明かりと、鍋から洩れる白い蒸気。

テーブルには何も入っていない食器が料理を待っていて、僕は空腹を感じながら姉さんを探した。

「姉さん？」

返事がないことを訝しがりながら、カウンターキッチンの中に入った僕は、そこに舞の姿を見つけて驚いた。

「姉さ……ん」

床にあおむけに倒れている舞の苦しそうに閉じられた瞳。病的なまでに青白くなった頬と、苦痛のためにかいた汗で前髪がべったり

と張り付いた額。僕が慌てて抱き起こすと、彼女の色の薄くなった唇からは微かな呻き声が洩れた。

「姉さん、しっかりしろよ！」

いつもの夕方。いつものリビング。いつもの食事。それらは本当にいつも通りの姿でこの場所にあったのに、舞だけがいつもと違っていた。

「姉さん！」

体の奥深くを冷めた汗が伝っていく不快な感触。それはまだ何が起こったかしっかりと理解できていないのに、本能的に絶望を感じ取った瞬間だった。

姉さんが壊れてしまった。

そう僕はとっさに思った。

脳裏に浮かんだのは、道路に打ち捨てられたハンカチ。どうしてか、姉さんとそれが重なって、僕は自分でもよく分からない焦りを感じた。きつと、舞が二度と持ち主のもとに戻らないハンカチのように、僕の傍から消えてしまうんじゃないか、そう思ったから。ちようど、心の半分が枯れてしまったような、気持ちの悪いアンバランスな状態の中、真っ白になっていく頭の隅で、妙にはやる鼓動が煩かった。

それからどうしたのかは正直憶えていない。なんだか霞がかかったようにボンヤリとしていて、曖昧で断片的な記憶があるだけだった。

た。気がつけば、慌てて会社から駆けつけてきた両親と一緒に、大きな縁の眼鏡をかけた医者から説明を受けていた。

彼は何の感情も読み取れない瞳で姉さんの病状を簡単に説明し終えると、「とりあえず、今のところすぐに命がどうこうという問題ではないのですが」と言葉を切った。

消毒液の匂いで息が詰まりそうだった。

彼の説明によれば、舞は心臓に先天性の欠陥があるそうだ。あまり詳しい内容は分からなかったけれど、心臓内にある心室同士が繋がってしまっている。だから、静脈と動脈が混ざってしまったって、正常な血液を全身に送ることができない。そんなところだったと思う。

隣で両手を胸の前で組んでいた父が、何度も大きく喉を鳴らしたのが分かった。

「ですが、もともとお嬢さんは体力のある方ではないようですね。それに心臓自体の力がそれほど強くない。手術をして、右と左の心室を正常に分けることはできますが、負荷がかなりかかるので、術後の生活はかなり限られたものになるでしょう」

医者は無機質な瞳で僕をとらえ、「それに」と言った。「頻度は定かではありませんが、今回だけでなく、何度か手術を繰り返す必要もあります」

彼がレントゲンをライトに掲げ、白衣のポケットに刺していたペンで説明を続ける。僕にはその話のほとんどが耳に入ってこなかった。ここにいない姉さんのためにも、代わりにしっかりと聞いておかなければならないことは分かっていた。けれど、頭が真っ白になっ

て、何も考えられなくて、唯、大変なことになってしまったという焦りだけがグルグルと螺旋を描いていた。

「一緒に頑張っていきましょう」

涙ぐんでいる母さんに医者が淡々とした口調でそう言った。

彼にとっては仕事の一部で、日常で、慣れてしまったことなのかもしれない。姉さんよりも、もっと重篤な患者をたくさん診て、たくさん死を知っているのかもしれない。だから、彼は何事もなかったように平然と話ができるのだろう。けれど、僕には黒い大きな縁の奥にある無機質な瞳がどうしても好きになれなかった。姉さんがこんなことになっているというのに、この医者は何とも思わないのだろうか。そんな身勝手な考えと、姉さんが倒れるまで気付くことのできなかった自分自身への苛立ちが、消毒液の匂いの充満する狭い部屋の中で募っていく。

二年前の冬の始まり。

優しく、綺麗で、憧れだった姉さんが初めて倒れた。

しっかりと握りしめた右の拳。僕はライトで照らされた舞の心臓を睨みながら、雪のようにゆっくりと、でも確かに積もっていく苛立ちをどうすることもできなかった。

? memories (3) (後書き)

感想等いただけますと、非常に励みになります。

ランキング参加中です。 バーナーのクリック、お願いします。

そこは灰色の場所だった。彩色的には白なのだろうが、たぶん訪れるほとんどのの人にとってはそうでないと思う。特に患者の家族とか恋人とか友人とか、関係が近ければ近いほど、親しければ親しいほど、この場所は憂鬱で印象はくすんでしまうのだ。だから、ベッドから身を起して窓の外を眺める姉さんを見たとき、僕は彼女がこの灰色の空間に押しつぶされてしまっうんじゃないかって不安になった。

「気分はどう？」

ここは個室だったけれど、何かに遠慮するように小さな声でそう言った。もしかしたら、病院という環境がそうさせるのかもしれない。

「そうね。悪くはないわ。痛みも我慢できないほどではないし。とりあえず大丈夫」

そう言って微笑んで見せる姉さんは少し痩せてしまったように思える。もともと細い方だった彼女は、ここ数カ月で一回りほど小さくなったし、透き通った白い肌には静脈が浮かんで、なんだか存在自体が儚かった。

「そう言えば、もうすぐ智也くんは三年生になるのね」と姉さんは言った。「私はこの調子だと進学できそうにないけれど、智也くんはちゃんと進学するのでしょうか？ この一年間は勉強で忙しくなるわね」

「そうかもね。まだ部活もあるし、勉強とか、進学とかはそれから考えるけれど」

「そっか。バスケットも頑張らないといけなかったね」

そう言っつて、姉さんはまた優しく笑う。いつもの、僕の知っている温かくて柔らかい瞳で笑うのだ。

昔から彼女はそうだった。自分がどんなに忙しい時でも、大変な時でも、他人の心配ばかりして。体力だつてそんなにある方じゃないのに無理ばかりする。そんなんだから、彼女の小さくて弱い心臓は壊れてしまったのかもしれない。

二回目の手術。

先天性の疾患と言っても、もともとそれほど大きな欠陥ではなかったのに、それは歳を追うごとに肥大していき、ついに彼女の体は悲鳴を上げた。倒れてからすぐに手術を行い、それから数カ月後の一昨日、二回目の手術が終わったばかり。二度もこの小さくて細い体にメスが入ったのかと思うと、僕はぞつとする。

窓の外では終わりがけの冬が僕らを見ていた。薄く伸びた白く濁った雲が傾きかけた空を背景に、冷たい風に流されている。

「やっぱり、また手術をしないといけないのかな？」

細い指をシーツの上で組んだ姉さんは、消え入りそうな声でポツリと、そう訊いた。僕は喉が急に干上がってしまったって、何度か口を開きかけて、でも言葉を発することはできなかった。

だって、何とさえいいい？

二回も辛い思いを経験して、またこれからも永延とそれを続けなければいけない。そんなことを目の前の、今にも壊れそうな女に言えるだろうか？

そう困り果てている僕を見て、「ありがとうね」と姉さんは言った。

「どうして？」

「だって、智也くん一所懸命私のことを考えてくれているでしょう？」

「・・・」

その大きな飴色の瞳で僕をとらえた彼女は、
「優しいね、智也くんは」と微笑した。

彼女だって分かっているのだ。自分の体のことだ、周りがいくら元気づけたって気付いてしまうのだろう。それでも訊かずにはいられない。そんな心境は僕にでも何となく分かる。

十年・・・なるべく心臓に負荷を掛けないように極力注意をしながら生活して、手術を何度か成功させて・・・。

姉さんの担当になったあの眼鏡の医者には、彼女のいない時に僕に声を掛けるとそう言った。

「僕もできる限り努力はするけれど、こればかりは本人次第と言ったところだろうね。ベストの状態が維持できたとして、十年が彼女

の心臓にとって限界だと思つ」

「十年……」

それはあまりに突然で短過ぎる宣告だった。

残りの人生が後『十年』。しかも、それは運が良ければと言つこ
とらしい。彼は大きな眼鏡の縁を指先で整えると、

「君が彼女を支えてあげないといけないよ」と言つて踵を返した。

消毒液の匂いのみついた白衣を見送りながら、僕は病院の薄暗
い廊下の端で動くことができなかつた。

姉さんが何をした？

そう思つた。

何かをしたからこんな状態になつたのか？ どうして姉さんなの
か？ いつだつて優しく温かで穏やかで、そんな彼女がどんな理
由があると言つので、こんなに苦しい思いをしないとイケないのだ
らうか？ ただ、皆と同じように進学して、就職して。そのうち、
あの家を出ていくのかもしれない。きつと姉さんが誰かと付き合う
ようになれば、僕は相手がどんな奴なのか見定めてやるうと思つ
て、でもきつと彼女なら素敵な男を連れてくるに決まっています。そ
して、お互いに結婚して、それぞれの家庭を持って、歳をとつて。
そう言う当り前の生活を彼女は憤ましく望んでいただけじゃないの
か。

病はあまりにも理不尽だ。

だって姉さんから全てを奪ってしまったのだから。『未来』という名の当り前の時間を消し去ってしまったのだから。

「智也くん？ どうしたの？ 怖い顔をして・・・」

僕の顔を覗き込むようにして、斜めに小首を傾げる姉さん。

「眉毛がこんなによつて。すっごく怖い顔」

大袈裟に大きな瞳をさらに大きくして、彼女は僕にそう言った。

「ああ、今度の練習試合のことを考えていたら自然とね」

「そうなの？ やっぱり相手は強いの？」

「まあね」

両肩を上げて僕はおどけて見せる。

「僕がいるから絶対に負けはしないけどね」

「すごい自信・・・」

自分の長い髪を指先に絡ませながら、姉さんが笑う。本当は部活のことなんか少しも考えてる余裕はなかったけれど、

「当然」と僕は笑った。

灰色のカーテン、灰色のシート、灰色の壁。くすんだ重たい部屋の中で僕らは小さく声を上げて笑う。そうやって彼女が少しでも心から笑えているなら、僕は道化にも躊躇いなくなるだろう。例えそ

れがほんの少しの時間に過ぎなくても、全くないよりはましだろうから。だから、僕らはくだらない話をいくらでもした。最近のテレビで見たドキュメンタリー。面白かった小説、美味しかった料理、新しくできたお店、学校での噂話。話題は何でも良かったし、だから尽きることはなかった。どうでも良いようなことでも姉さんは時に真剣に、楽しそうに、懐かしそうに聴いてくれたから、僕は遠慮なく話をした。要は、話自体がというより、一緒に話をしているということが大事だったから。

言葉の隙間に落とされる相槌。何気ない微笑。

少しでも彼女が僕を求めるのなら、家族として、弟として、それに応えてあげたかった。もしかしたら、実際に血が繋がっていないからこそ、その絆を一層意識するのかもしれない。

「いつもありがとうね」

ふと、会話が途切れた時に、彼女がそう言った。

「智也くんが来てくれるおかげで、私はその間病氣のことを考えないでいられるの。そうは言っても痛みがなくなるわけじゃないのだけれど、それでも一人でいる時よりも、ずっと・・・」

姉さんの肩越しに夕日が差し込んできて、灰色の病室がこの時だけは真っ赤に燃えあがる。ほんの少しの間だけ色のない世界から解放される瞬間だった。

「いいんだ。僕は姉さんの弟だから」

夕陽の輝きに瞳を細めて、ちょうど影になった彼女に向かって言

った。

「たぶん、『もう来なくていい』って言われても、僕は姉さんが気になって仕方ないと思う。それなら、こっやって顔を見て安心していた方が、よっぽどお互いのためだと思うよ」

「そうかしら？」

「きつと、そっだよ」と僕は頷く。

それに合わせて微笑する舞。表情のほとんどは逆光のせいで分かんなかったけれど、彼女がいつもの優しい瞳で僕を見ていることを意識する。

「なら、明日も明後日も、ずっとずっと、智也くんが来れるときはお見舞いに来てください」

「うん、了解」

できるだけ気軽に、彼女に気にさせないように僕は明るく返事を返す。こんなときだって誰かに頼るのを遠慮してしまうのは、姉さんの悪い癖だと思うから。

「なら、僕はそろそろ帰るよ。面会時間も終わるし」

「そっね」

ベッドから出ようとする姉さんを押しとどめて、僕は素早く荷物を手にすると廊下に出る。

「また明日来るから」と僕は言った。

「無理はしないで」

「うん」

この狭い病室に姉さんを一人残すのは、何度経験しても慣れなかった。でも、灰色の病室が色彩を帯びているこの夕暮れ時なら、少しはましかもしれない。それは単に僕の自己満足かもしれないけれど、やっぱり色のない病室で見送る彼女を見ると、今にも消えてしまふんじゃないかって不安になるから。

真っ赤な部屋。金色に輝く髪。影になつて見えないけれど、きつと僕を見る瞳は優しくて……。

閉まつていく病室の重たい扉。だんだんと遮られていく視界に、ちょっとだけ寂しさを僕は感じて、小さく手を上げると左右に揺らして見せた。その時、扉の閉まるほんの一瞬のことだったけれど、ベッドから体だけ起こした姉さんが素早く唇を動かしたのが僕には分かった。

その言葉はきつと僕の勘違い。

間違つても彼女がそんなことを言うわけがない。

でも、僕には姉さんの薄い唇が夕陽の中でこう眩いたように見えたのだ。

『A・I・S H I・T E・R U』と。

パタンと音を立てて閉まつた扉の前で、僕の心臓は大きく跳ね上

が
っ
た。

? memories (5)

視界全てに入ってくる空に遠近感はなく、すぐそこにあるような気もするし、でも、とてつもなく遠くにあるような気もした。目の前を薄い霧の雲がゆっくりと流れ、まるで時間の流れが穏やかになつてしまったようで、のんびりとした怠惰な感覚に僕はあくびを噛み殺す。

風一つない静かな昼下がり。枕代わりになっている厚めの文庫本とコンクリートに思いつきり投げ出した手足。大学の屋上にやってきた僕は何をすることもなく、唯こうして、一人でぼんやりと空を眺めていた。

ゆっくりと右手を空に翳して見る。

そこには届きそうで届かない、有るのか無いのかさえ分からない、魅力的なのに当り前な青が流れているから不思議だ。本当に空はあるのだろうか？ ふと、そんなことを考えてしまう。

「流石に徹夜はきついな・・・」

今感じている時間のように間延びした口調でそう言うと、ぼくは再度込み上げてきた欠伸を思う存分して、浮かんできた涙に瞬きを繰り返した。頭の中は靄がかかったように思考が朦朧としていて、なんだか一気に歳を取ってしまったように全てが億劫で仕方ない。

昨日の夜。いや、正確には今朝か。

こっそり家を抜け出した僕は海に出て、眠れない一晩を明かした

のだ。なんとなく静かな海を眺めていたら、舞との思い出が込み上げてきて感傷にすっかり浸ってしまった。気がついたらあたりが白み始めて、気だるい体と妙に冴えてしまった頭が家に戻っても眠らせてはくれないまま……。

「やっぱり、今日はサボった方が良かったかもしれないなあ」

そもそも、こんな寝不足の状態で学校に来たって、折角の講義が欠片も頭になんて入って気やしないのだ。もともとそんなに真剣に日頃から講義を取っているわけではないけれど、それでもこんな状態ならなおさらだと思う。

でも、本当はそんなこと……僕にはできない。だって、舞はこうして大学に来れないから。

実のところ、彼女はほとんど外に出ることもない。唯、あの家の中で静かに大人しく生活しているのだ。ひたすら自分の壊れかけの心臓にこれ以上負担をかけないように生活している。だから、たまに体調がいい時、僕は出来るだけ舞を外の世界に連れ出すようにしている。

そこにあるのは当り前の日常。ありふれた景色。

けれど、舞にとってはいつだって懐かしさと憧れと苛立ちの詰まった特別な世界。

だから、僕は彼女の経験することのできない特別を、彼女の代わりにできるだけ経験しなければいけなかった。それを舞が望んでいたから。

『二人で一つなのよ』

舞はそう言つて、自分の傍から離れようとしないう僕を日常へと押し出した。たぶんそうしてくれなかったら、一秒でも限りのある二人の時間を過ごしたいと望んで、僕は外に出ようとしなかっただろう。だから、舞は言ったのだ。

「私は智也をダメにするために好きになつたんじゃないの。唯、寄り掛かっているのが心地いから好きになつたんじゃないのよ」

いつになく真剣な瞳をした舞は、僕よりもずっと大人びた口調で、「だから、智也は普通の生活をして。私にとって、特別になつてしまった生活を……。だって、私たちは二人で一つになつたのだから。私のできないことは、智也がしてくれないと」と言つて笑つた。

だからこそ、僕は彼女のいけなかつた大学という日常を、放棄するわけにはいかなかつたのだ。

「それにしても……。眠たい」

溜息に似た言葉が漏れて、どこまでも穏やかな空が眩しい。

もしここが固いコンクリートじゃなくてベッドの上なら、今この瞬間にも眠れるのに……。そう思いながら、もう一度手足を思いつきり伸ばして、僕は大きな空を独り占めした。

考えてみれば彼女の日常が失われなかつたなら、僕らは姉弟という関係のままだったのかもしれない。こうして眠たい目を擦りながら講義に出ることもなかつたし、彼女だつて自分の好きな時に好きな処に出かけて、思うままに生活できたはずだ。

失われた普通の生活。そして、生まれた僕らの恋。

僕は誰かを愛することがこんなに悲しくて、素晴らしくて、残酷で、幸福なことだったなんて知らなかった。もつと淡くて切ない、映画とかドラマとか小説とかみたいなのが恋愛なんだとずっと思っていたのに、現実はとつてもひどいものだった。

舞を本当に愛しているのに、でも、それが彼女の不幸の上に成り立っていることを意識しなければならいなんて。本当にひどいとだ。

だから、僕は奇跡も神も信じることはない。そいつらは何もしてくれないから。

ほとんど睡眠へと落ちかけている思考の中で、微かに開いた瞼の隙間から空の青を眺める。

昼下がりの屋上。風一つない静かで温かい冬の日。

思い出すのは舞からの秘密のメッセージ。僕だけに向けられた、彼女を一人の女性として意識させた決定的な言葉。

『A・I・S H I・T E・R U』

あの時に感じた死んでしまうくらいの胸の高鳴りは、今にも先にもあの瞬間だけだった。あの時、音のない夕陽に彩られた病室で、舞の唇が僕に向かって五つの形を作った。それは魔法のように一瞬で僕の心を虜にしまった。たぶん、その前から彼女に恋をし始めていたのだと思うけれど、きつと本当にその気持ちを意識したの

はあの時が最初だった。

しっかりと閉じられた病室の扉の前に突っ立って、僕は暫く動くこともできなかつたのを覚えている。後でよく考えれば『アイシテル』ではなく『アリガトウ』だ。だって、お見舞いに来た人間を見送る言葉は普通そうだから。

けれど、一瞬の間隙について掛けられた魔法に動揺して、僕はぜんまいの切れた人形のように茫然と突っ立っていたかと思うと、看護師の注意を耳にしながらも、突然あらん限りの速さで病院を駆け出したのだ。

それは幸せで残酷な勘違い。

舞に恋する僕の心をほんの少し押ししてくれた、おかしな瞬間だった。

もう、すっかり日が暮れてしまっていたから、肺が破裂しそうなくらい悲鳴を上げて肩を鳴らしながら立ち止まったそこは明りが点いていた。

規則正しい間隔で並んだ街灯。

その切れ目にそれは在った。

小さな、でも綺麗に整えられているそれは、街の一番見晴らしいのいい高台にある教会。微かに瞬き始めた星が、煙突のように空に突き出した鐘楼の傍に、二つほどあったのを覚えている。

何と言うか、この時の僕は色々と一杯いっぱいだったのだと思う。

混乱していたと、言うべきだろうか？　いつもは目もくれない人の気配のないその場所に吸い込まれるようにして、重たくなった足を伸ばしたのだ。

コッソん……。

金具の軋む音をさせて木製の扉を開けると、思っていたよりもずつと広い部屋に足音が反響した。きつと吹き抜けの天井がそうさせるのかもしれない。蝋燭の明かりで照らされる長椅子。今は祭壇の横で沈黙を守っている大きなパイプオルガン。そして、僕の視線を釘付けにしたのは、七色のステンドグラスで造られた神秘的な場面だった。

赤、橙、黄、緑、青、藍、紫が背中から差し込んでくる月明かりを透過して僕の視界を彩っていた。そこに描かれているのは三人。女と赤子と翼を持つ男。僕はクリスチャンじゃないから、その絵がどんな意味を持っているのか分らなかつたけれど、唯、その美しくて神秘的な場面に息を呑んだ。

たぶん荘厳って言葉はこういう物のことを指すのだろう。

ひんやりと夜の湿気を含んだ空気を感じながら、音をなるべく立てないようにそつとスニーカーを進めて、祭壇の前の席に腰を下ろした。ジーンズ越しに伝わってくる冷たい椅子の感触を意識しながら、僕はさつきまでの動揺が嘘みたいに静かな気持ちでそのステンドグラスを見る。

まだ幼い赤子の無垢なガラスの瞳。

何秒か、何分か、何時間か、時の感覚がなくなってしまうような

気がするほど、唯、静かに僕は見つめる。

そして、風がひととき大きな音を立てて建物の外を通り過ぎるのを聞きながら、

「たぶん・・・」と言った。

「神なんて一生信じることなんてないと思う。この世に奇跡なんてないし、有ったとしてもそれは偶然と必然が重なって起きることだっと思う」

誰に話しているわけでもない、唯、独り言を漏らすように僕は言葉を紡いだ。

「でも、姉さんに・・・舞に与えられた運命が、こんなにも理不尽なものなら、僕は彼女がその運命に押しつぶされないように奇跡を願ってしまう」

だって、と僕は続けた。

「こんなにも僕は無力だから。だから、もし、神って存在がいるのなら、助けてくれませんか？」

応える者のいない問い掛けが、高い天井に反響して何度も僕に訊ね直す。一時の静寂を感じ、何の答えのないことを確かめて、「けれど、もし・・・いないなら。僕が彼女を守って、支えていく。僕は弟に過ぎないけれど、舞が好きだから。そして、彼女も僕を好きでいてくれるから」と言った。

それは甘くて切ない勘違いだったけれど、魔法にかかっていたから、何の躊躇いもなかった。

睨みつけるように七色に輝く三人を見る。たぶん、こんなに真剣に何かを言ったことは、今までなかったと思う。誰も答える者がないことは分かっていたし、答えを期待してもいなかったけれど、そう宣言することですっかり混乱していた自分の気持ちを理解することができたのだと思う。

僕は姉さんに恋してる。

ただ、それだけのこと。でも、これほど重要なことはないと思う。

この先、彼女はきつと今よりも辛い状態になっていくだろう。もっと儂く、もっと苦しく、もっと孤独に。そんな中で、僕なんかにできることがどれだけあるのか、そもそも出来ることが一つでもあるのかさえ分からない。でも、彼女が本当にその苦痛に耐えられなくなってしまう時、一番近くにいて少しでも支えることができればいいと思う。

それも、弟としてではなくて、恋人として。

たとえば、世界中の人が敵になるとしてもかまわない。姉弟だからという理由で、この気持ちをどうして隠す必要があるだろうか？
だってこの世界に神はいないのだから。何を恐れる必要があるだろうか？

それに……、

「僕はあなたを敵に回してもいい。姉さんの為なら」

そう、舞の為なら、それさえ恐くはない。

七色のステンドグラスが、静かに僕を見つめていた。

? memories (6)

世界は笑っていた。

世界は泣いていた。

世界は怒っていた。

世界は……。

両手をそつと広げて深呼吸をする。鼻腔を通して肺に流れてくる空気は潮の香り。耳を撥る波の音と、チラチラと輝く空の星。目を凝らして見なければ、どこからか空で、どこからか海なのか分からないほど、二つは闇を纏い、星を抱きかかえていた。

「智也くんは悲しいって思ったこと、ある？」

隣で、僕と同じように海を見ていた姉さんがそう言った。

「うん。たぶんあるよ」

「そつ」

彼女がどうしてそんなことを訊いたのかわからなかったけれど、その声は迷子になった子供みたいに心細そうだったから、僕は姉さんがどこか遠くへ行ってしまうないように、砂の上に置かれた手をそつと重ねる。

「私はね。悲しいって思ったこと、今までなかったのかもしれない。だって……」

強い風が吹いて、銀色の睫毛を瞬かせた彼女は、

「本当に悲しい時って、心がこんなに痛くなるんだって初めて知ったから」と言った。

春の終わり。連れだって夜の海にやってきた僕らは、星たちに話を聞かれないように、掠れ声で言葉を交わした。広い銀色の浜辺には二人しかいないと言うのに、秘密の言葉を交換する。

彼女が倒れてから、ちょうど四度目の手術を終えた夜。もう、あの魔法の言葉をもらって、何ヶ月も経ってしまつた夜。彼女はこっそりと僕を病院の外に呼び出すと、何も言わないまま海へやってきた。僕も同じように何も訊かずに彼女の後を付いてきた。無言で腰を下ろした姉さんは、ポンポンと隣を叩いて僕を促すと、黙つたまま海を見続けた。そして、

悲しいって思ったこと、ある？ そう、ポツリと言葉を落とした。

「心ってね。痛くても血が流れたり、痣ができたりしないでしょ？ だから、誰もこの傷には気づいてくれないの。でも、私の心はもう、ボロボロになってしまったかも」

そう言って微笑して見せる彼女は、今にも壊れてしまいそうで、なのに美しかった。

「何度も、何度も痛い思いをして。何度も、何度も怖くて寝れなくて。苦い薬も飲んだし、お医者さんの言うことを聞いて出来るだけ

のことはしたのに・・・」

私はどんどん弱くなっていく。

掠れる声に重なる波の音。

僕は何て言ったらいいのかわからないまま、唯、彼女の瞳を見つめる。触れた彼女の手の甲は思っていたほど柔らかくなくて、骨の感触ばかりだった。正直、姉さんはびっくりするくらい痩せてしまった。もともと細い彼女は一回り、また一回り、と手術をしていくにつれて小さくなっていき、今では腕なんか、僕が力を入れて握ったら折れてしまうんじゃないかってくらい細かった。

もう体力も、気力も、姉さんには残っていないのかもしれない。

自分の愛する人が日に日に弱っていく。それは、僕自身が何もできないだけに、苦しくて、悲しい時間だった。姉さんが言うように、心が痛むほど。血は流れないし、痣もできないから誰にも気づかれないけれど、本当に痛い。

「もう、終わりにしたいよ」と姉さんが言った。

「私、結構頑張ったと思うんだ。もう、いいんじゃないかな？ 智也くん」

星の瞬きを閉じ込めた瞳が僕を覗き込み、訊く。

この苦しい日々から解放されてもいいんじゃないかと。

「痛いのは嫌だしね。それに、私の体、傷だらけなんだよ」

そう言っただけで彼女は自分の胸の辺りに手を置いた。

「四回分。結構大きいのが四本。すごく嫌だよ」

空いている方の手に砂が食い込む。僕はいたたまれなくて、彼女の瞳から目を逸らした。

「私、どうしたらいいのかな・・・もう、お嫁にもいけないだろうし。そんなことよりも、将来すらない。残った時間はそれほど多くはないだろうし」

「そんなことは」

慌てて否定しようとした僕に、突然、彼女は鋭い視線を向けた。

「もう、嘘はたくさんなの！ 智也くんまでそう言うことを言うの？ もう少し頑張ったら良くなるから、もう少し我慢すれば楽になるからって」

みんな嘘ばかり。

彼女の栗色の髪が宙に広がり、掴まれた袖が引っ張られて歪んだ。

「嘘を言うのはやめて！ 智也くんまで私を騙さないで！」

「僕は・・・」

何て言えばいい。彼女の命が残り少ないのを知って、何もできずにいる僕は……。何て言えばいい？

励ませばいいのか？ 怒ればいいのか？ 懇願すればいいのか？
どれも今の彼女にとっては無意味なことに過ぎないのに。

「もう、分かっているの。私が壊れていることぐらい」

噛みしめた奥歯が音を立て、突き立てた指が砂を掻いた。

「嫌なの、痛いのは、苦しいのは」

彼女はそう言って銀色の涙を零した。

たぶん、初めてだと思う。姉さんが泣いたのを見たのは。ずっと我慢してきて、気丈に振る舞って、今、彼女の心は折れたのだと思っただ。僕を見据える瞳は見たこともないほど鋭いものだったのに、彼女の大きな飴色の輝きからは水滴が零れ落ちて行った。

だから、僕は細い肩を乱暴に抱き寄せる。

「ごめんね」と彼女にだけ聞こえる声で囁く。

「何で？ どうして？」

僕の胸の中で嫌々をする姉さんは訊く。

「私が何をしたからこんなに辛い思いをしないといけないの？ 何でこんなに痛い目にあわないといけないの？」と。

でも、僕はその答えを持っていなかったから、唯、彼女を抱きしめているしかなかった。

叫びは嗚咽を交え、ジャケットを通して感じる悲鳴が痛かった。

「私が何をしたの？　いつまでこんな思いをしないといけないの？」

銀色の夜。波が優しく押し寄せ、星をちりばめた海がキラキラと輝く。吹いてくる潮風は時に強く、時に穏やかに頬を撫で、そして僕らを追い越して行った。

どうしてだろう？　どうして姉さんなんだろう？

そんな問いは僕自身が何度となくしてきた。

どうして、僕の一番大事な人が苦しまなくてはいけないのか？

病院と言う鳥籠の中に囚われたまま、短い命を削りゆく姉さんを見て、その理不尽な現実に目眩がする。それでも、答えは誰も与えてくれない。

「私は……」と彼女が言った。

「このままどうなってしまうだろう。皆がそれぞれの人生を歩いて行くのに、私はあの病室で立ち止まったまま」

それは、悲痛な叫びだった。

だから、僕は金色の輝きを放つ月を見上げて願った。姉さんが少しでも楽になるように、その不安から解放されるように、涙を、痛々しい叫びを受け止めて欲しいと。優しい金色の輝きで守って欲しい

いと。

小さな彼女の肩を抱きながら、僕に出来ることはそれだけだったから。

「もし」と震える声があった。「もし、神様がいるなら、どうして私を助けてくれないの？ こんなに苦しいのに、こんなに辛いのに。私はもう、どうしていいか、分からないよ」

「神様なんて、いないよ」

彼女の湿った瞳が僕を見上げ、大きな雫がまた一つ頬を流れて行った。

僕は優しくそれを指先で掬って、それにと続ける。

「いたとしても、僕ら人間を助けてくれ程、暇じゃないよ」

「そうかもね・・・」

クシユンと、鼻を鳴らした姉さん。僕は長い栗色の髪をできるだけ優しく撫でる。奇跡なんて、そんなものはあるわけがないのだ。いくら願ったってそんなものは起きなかつたし、これから起きる気配もない。だから、人間は自分に出来るわずかなことをするしかないのだ。

「ねえ、智也くん」

形のいい瞳が涙で揺れて、覗き込んだ僕は吸い込まれそうになる。

「もう、私は泣かないから……。最後に思いつき泣いてもいいかな？」

そう言った姉さんの肩は、もう堪えられないくらい震えていた。

それだけでなく、どうしてダメだなんて言うことができるだろう。

だから、確りと彼女に頷いて見せた僕は……。もう一度、今度は出来るだけ優しく彼女を抱き寄せると、

「泣いていいんだ。僕の前なら……」と言った。

人生でこんなに優しく言葉を伝えようとした瞬間はなかっただろう。両腕の中で震える小さな温もりを感じながら夜空を見上げる。

春。銀色に染まった砂浜に二人の弟姉がいた。

彼女は本当に小さな子供みたいに、思いつき声を上げて泣いた。

悲しくて、悲しくて仕方がないというように。まるで、今まで貯め込んでいた世界中の悲しみが彼女を通して一気に溢れてしまったように。

いつまでも、いつまでも……。

今夜、世界の涙は止まらなかった。

? memories (6) (後書き)

アドバイスや感想等いただけますと大変励みになります。
のバーナーをクリック、お願い致します。

? memories (7)

夢を見たの……。

そこは色と音のない場所だった。

いや、正確には色も音もあるのだろうが、『無い』と感じてしま
う、そんな場所だった。仰向けになった後頭部越しに砂の擦れる感
触がして、視界に飛び込んでくるのは星、星、星。耳を擦る穏やか
な波以外、聞こえてくるのは姉さんの澄んだ言葉だけだ。

「いつだったか、もう忘れてしまったけれど。私は夢を見たの」

彼女の肌が直接僕の肌に触れ、高なる心臓と妙に気だるい感覚が
心地良かった。

「どんな夢なの？」と僕は訊く。

「たぶん、悲しい夢。ずっとずっと、誰かを待っているのだけれど、
その人は来ないの。それでも、私は待たなければいけないの。だん
だんと錆びて行く風景の中で、私だけがぼつんと取り残されていく。
……そんな感じ……」

「それは悲しい夢だね」

「そう、悲しい夢」

そう言って、姉さんの頬が僕の胸の上でプクッと膨らむ。

「たぶん、待たせていたのは智也くん」

下唇を不満そうに持ち上げて彼女は言う。

「どうして?」

「だって・・・」

そこで恥ずかしそうに姉さんは顔を背けると、さりげなく体を起して両手で自分の身体を隠した。

僕は服を着ていなかったから、そんな風に海辺で体を覆う彼女を見ていると、有名な絵画を思い出してしまう。別に、その絵画の女神を美しいとは正直思ったことはなかったけれど、僕の目の前にいるヴィーナスはとっても美しかったし、エロティックだった。

「なかなか言えないものだね」と僕は言った。

「何を?」

「好きだったこと」

「そうね」

体を斜めに傾けた姉さんは僕の頬に手を伸ばす。

「どうして、私なの?」

「うん？」

どうして、と彼女はもう一度訊く。

「私のことを好きになってしまったの？」

そんな言い方をすると、姉さんを好きになったことが悪いことみたいじゃないか。僕はそう思った。

「なら」と僕は彼女のまねをして下唇を持ち上げると、「どうして姉さんは、僕なの？」と訊く。

彼女は形のいい顎を少しだけ斜めに傾けると、

「智也くんは、私が寂しい時に、怖いくらい傍にいてくれたのも。まるで、私の心が分かるんじゃないかって程」と微笑した。

「そうなの？」

大きく頷いて見せる姉さん。

傍にいて欲しいって思った時に、あなたはいつも一緒にいてくれた。

「これで好きにならずにいる方が難しいと思うの」

「そうかな？」

「きつと・・・」

頬を赤く染めて僕から海へと視線を移す彼女。

「きつと、あなたと出会った時から、こうなることが決まっていた

んじゃないかって思えるくらい・・・今は、私が智也くんを好きになっちゃったことが自然に思えるの」

「うん」

そう頷いて、僕は真っ暗な空に輝く月を見上げる。

金色の円。優しく、澄んだ光。

たぶんこの世に神なんていないのだけど、それに近いものがあるとすれば、それは月なんじゃないかって僕は思う。地上にいるすべての生き物の願い、涙、叫び、歓喜。それらすべてを受け止めてくれる。

奇跡を起こしてくれるわけでもない。

特別な救いがもたらされるわけでもない。

きつと、唯、全てを見て、全てを聴いて、全てを受け止める。それだけに過ぎないけれど、きつとそれがこの世界の神様の役目なのかもしれない。

「どうして・・・」

風が僕らの間を通り過ぎて行った。潮の香りを含んだ海からの風が。一瞬、彼女の栗色の髪が金色の光の中で揺れて、また静けさが支配する。

「どうして、智也くんは私のことが好きになったの？」と彼女が訊いた。

音のない静かな世界で、愛する人が砂浜に横たわる僕の瞳を覗き込む。たぶん、世界の果てがあるならばここに違いない。なんとなくそう思えてしまう場所で、彼女が僕に訊く。

「私はこんなに弱くなってしまった。未来もない。なのに、どうしてあなたは私を愛してしまったの？」

揺れる瞳が彼女の不安な心を見せてくれたから、僕は体を起して彼女の正面に向き合った。

ざらざらとした砂の落ちて行く感触。

目の前の姉さんは、僕の記憶にある彼女のよりもずっと儂くて、小さくて、弱くて。でも美しかった。

抜けるほど透明な肌には四つの傷跡。

僕はそれにそつと指先を這わせて、眉を寄せる。

「姉さんも言ったじゃないか。僕らがこうなるのは自然なことなんだよ」

「運命ってこと？」

「何度繰り返しても、同じ選択をしてしまう。そのことを運命というのなら、そうなのかもしれないね」と僕は言った。

長い髪が彼女の肩から胸元へと零れて行き、傷を隠すように僕の指先を覆った。

「私たちは姉弟なのには？」

「うん。それでも」

真剣な瞳。僕の好きな飴色の瞳が何度か瞬きを繰り返して、それは心を覗かれているみたいに深く透き通っていた。

「僕は姉さんほど、『魂のひどく美しい人』を知らないんだ」

「えっ」

彼女は何を言われたのか分らないという風に一瞬瞳を丸くすると、「それってすごくキザなセリフね」と小さな声で笑った。

それにかまわず、僕はそっと彼女の胸から首筋に指を這わせて、「だから、姉さんが好きになった。そのことに後悔なんてないし、これからもしない」

「本当に？」

「うん」僕は力強く頷くと、「だって、この世界に奇跡なんてないのだから。神様はいないのだから。だから、僕らが姉弟だっていいじゃないか」と言った。

世界の果て。金の月と銀の砂。僕と姉さんしかない場所。

たぶん、僕にとってこの場所は完成されていた。不足ない場所だった。

「私と一緒にいることで、智也くんを不幸にしてしまうかもしれないわ。それでもいいの？」

　　飴色の瞳がそう僕に訊く。

「僕にとっての不幸は、姉さんと一緒にいられないことだよ」

　　だってそうだろう？

　　姉さんがいることで、世界はこんなに完成されているのだから。

「僕は姉さんほど、魂の美しい人知らない。そして、そんな姉さんを好きになった。それはどうしようもないことで、どうかすべきことでもない。だから、今は姉さんも僕のことを好きだと言ってよ」

「うん」と、彼女は小さく微笑して、「分かったわ」と頷く。

　　もう、何も必要なものはなかった。

　　ここには姉さんがいて、僕がいて、全てがそろっていたから。

　　だから、ずっと夢の中でポツンと佇んでいた彼女と、今は少しでも一緒にいたかった。

　　重なる肌と体温。

　　滑らかな感触が触れ合って、ゆっくりと僕は彼女を砂の上に押し倒した。

「ずっと待たせてしまったね」

色褪せて行く夢の中で、一人待つ姉さん。

僕はもう、離すことはないだろう。

絡み合う指先に吐息が交じり、彼女の言葉が僕に囁く。

『智也、愛してる・・・』

何度も繰り返されるその言葉は、もう僕の勘違いではなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3923u/>

天使に愛の歌を

2011年10月11日08時54分発行